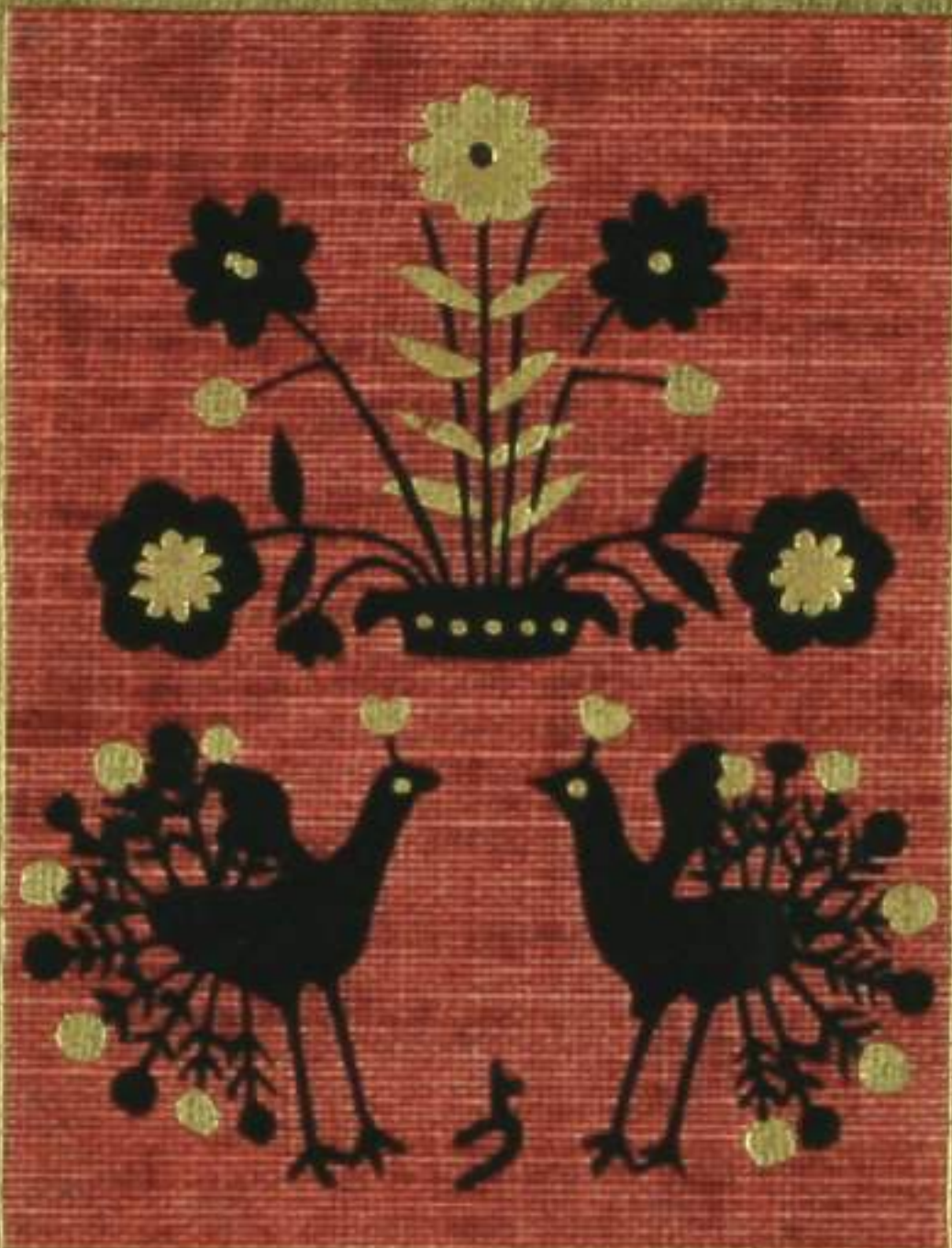
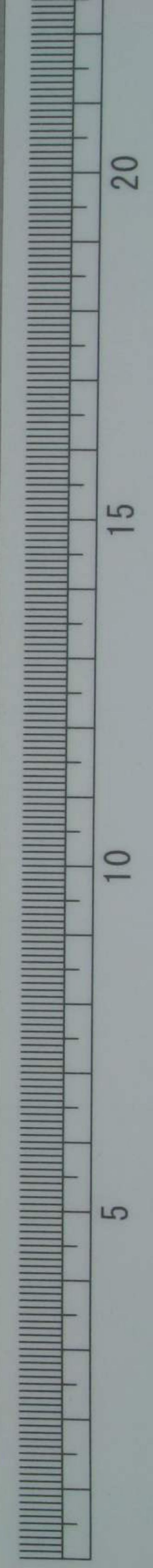


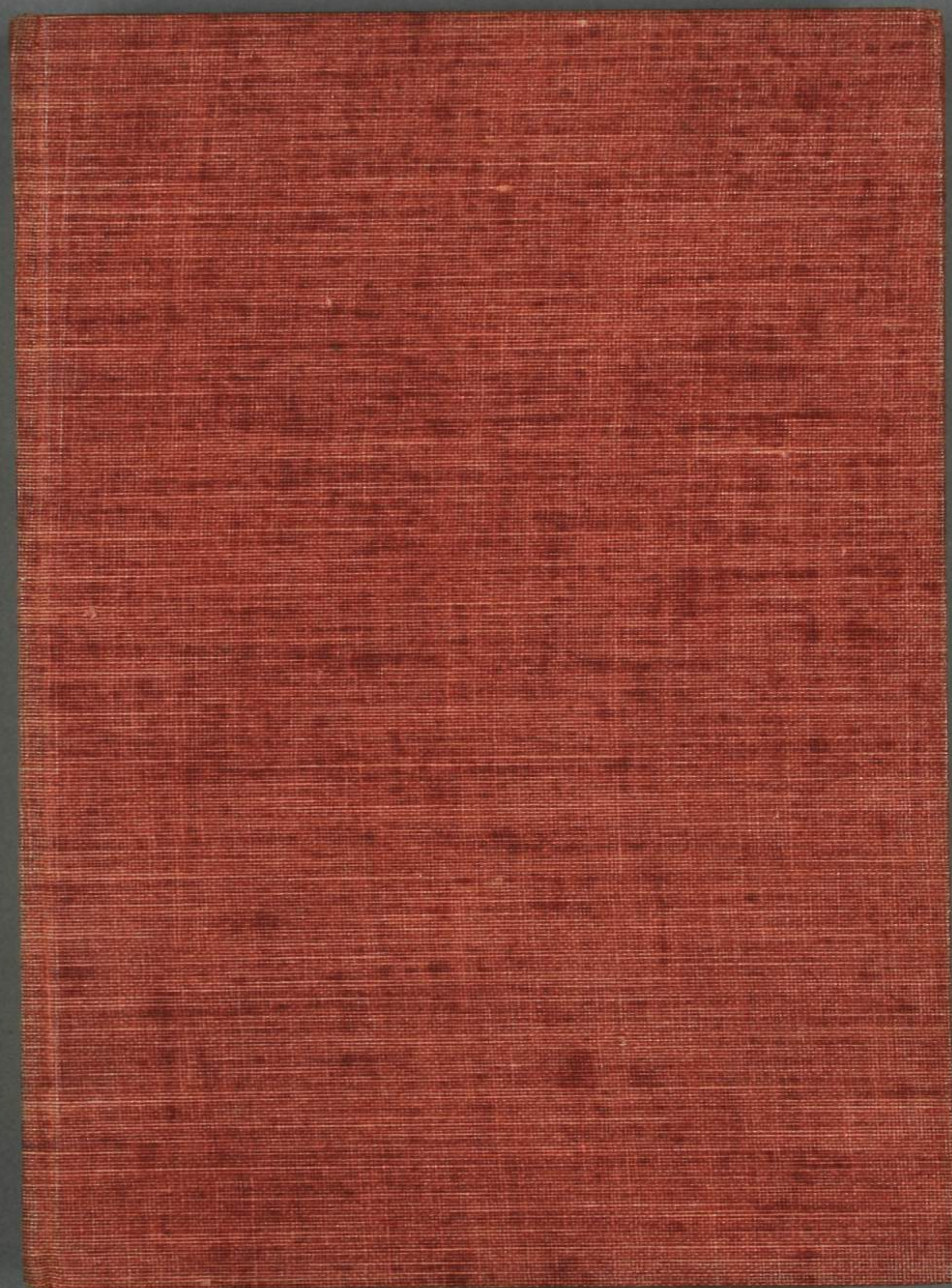
ナンブ・ナンモ



作クンツルテメ
譯月袍村島



モンナ・ヴァンナ





ナンワナンモ

作 者 三 浦 良 一
挿 画 島 村 武 蔵



北 南

ナンヴ・ナンモ

作 クンワルターメ

譯 月抱村島



社 北 南

小 林 德 三 郎 君 裝 飾

序

イブセンが死んで以來の歐洲劇壇の最高地位は誰れに與へれるか。ハウプトマン氏か、ショー氏か、メーテルリンク氏か。今日の所では少くとも其の作風に新機軸のある點で、メーテルリンク氏が第一の候補者に推される。けれども茲で其の等級を極めようとするのではない。

『モンナ・ヴァンナ』(Monna Vanna)はメーテルリンク氏が四十歳のとき、千九百二年の作で、其の作風及びそれに見はれた思想に一變化を來たす回轉期の産物であると稱せられる。時も處も分らない、夢のやうな、神秘的な世界から、明確に事物の影の見

二
える世界へ出て来た作である。此の作に至つて、始めて十五世紀の末のビザといふ、明かな時處を指定すると共に、形式もシェークスピア以來の史劇の組織に近づいた。暗に死の沈黙が運命の最高象徴であるといふ思想から、生の喜び、靈智の光り、愛の潤ほひ、新生活の美しい夢といふやうな明るい思想に移りかけたのである。斯うして夢幻と現實との間を出入するところに此の作の味がある。近年に出た歐洲の新史劇中で、此の作の如きは最も模範的なものゝ一つである。個人の運命の回轉する高潮時を、華やかな史劇の形式に包んで現代的な人生問題と傳來の劇的興味とを調和せんとしたものと言つてよい。此の劇の出た年に、パリで初めてヴンナに

扮して有名な女優は、作者の夫人ルブランである。

作者メーテルリンク(Maurice Maeterlinck)氏は千八百六十二年ベルギーのガンに生れた。

此の譯は Alfred Sutor 氏の譯に Friedrich von Oppeln-Bronikowski 氏の獨譯と原文を參酌したものである。「モンナ・ヴンナの」邦譯は、數年前山岸荷葉氏が川上一座のために翻譯して、明治座で演せしめたものがある。今回は勿論全部原作によつたもので、「藝術座」の第一回上演として大正二年九月十九日から十日間有樂座で演せられることゝなつた。其の主なる役割は下の通りである。

モンナ・ヴンナ

松井須磨子氏

フリントワルレ
ギド
マルコ
ツリウルチオ
ボルソ
トレルロ
ヴェディオ

澤田正二郎氏
鎌野誠一氏
笹本甲午氏
倉橋仙太郎氏
宮島文雄氏
波多讓氏
中井哲氏

尚ほ今度の上演に、開幕劇として、同じ作者の前期の作風の一面を代表する一幕物内部 (L'Interieur) を加へることゝなつた。よつて秋田雨雀氏に囑して其の譯に成る臺本をも本書の卷末に合刷することゝした。

大正二年九月

藝術座事務所にて

島村抱月

モンナ・ヴンナ

メーテルリンク作
島村抱月譯

第一幕

ギドー・コロナナの殿中の一室
ギドー及び其の副官ホルソミとレルローミが開いた窓の側に立つてゐる。窓からはピザの周囲の田舎の景色が見える。

ギドー 我々は目下非常な危急の場合に瀕して居る。政府もとうとう、已むを得ないで、今まで隠して居た敗北を私に打ち明けたが、ヴェニスから派遣した援軍は二軍ともフィレンチエ人の爲に圍まれてゐる。一軍はピビエナで圍まれ、一軍はエルチーで圍まれた。キウシー、モンタローネ、それからヴェルニア、アレツゾーの山道、カゼンチーネの谷間——残らず敵軍に占領せられて了つた。我軍は孤立してゐて、手の出しやうが無い。フィレンチエ人の思ひのまゝになるのだ。フィレンチエ人といふ奴は、自分等が

第一幕

人物

- ギドー・コロナナ (ピザ守備軍の司令官)
- マルコ・コロナナ (ギドーの父)
- プリンチヴェルレ (フィレンチエの雇傭大將)
- ツリヴェルチオ (フィレンチエ共和国の辨務官)
- ボルソロー (ギドーの副官)
- ヴェディオ
- ジオヴァンナ (プリンチヴェルレの秘書官)
- 「モンナ・ヴァンナ」 (ギドーの妻)

十五世紀の末

場所

第一幕と第三幕とはピザ、第二幕は其の市外

(譯者いふ、人名、地名等必ずしも一貫した原音によらず、日本の観望に適するやう便宜の發音法を混じて譯した。)

大丈夫になると、少しも容赦をしない。我が軍隊も人民も、まだこんな敗北は知らないであるが、併し怪しい噂は立つてゐる、そして目を追うてそれが明かになつて行く。本當の事が知れたら、ビザの人民は何をし出すか知れない。彼等の怒りは我々や政府の上に向いて来る、恐怖と盲目的な絶望に驅られて、真先がけに我々を犠牲にするに違ひない。三月以上も續いた長い籠城を、彼等は我慢して來たのだ。あれ程勇敢に困難を忍んで來たのだから、今となつて彼等が餓と不幸のために狂氣の振舞をしたからと言つて、少しも驚くに足らない。一つの望みが彼等に殘つてゐた、それが無くなつたのだ、それと共に我々の權威も地を拂つて了つた。我々はさうする事も出來ない。敵はビザの城壁を破壊して了ふ。ビザは亡びて了ふ……

ボルソー 我軍はもう最後の矢まで射て了ひました。彈藥も盡きましてございます。穴庫の隅々まで探したつて、一オンスの火藥も見つかりつこはございません……

トレロー 大砲の丸も、もう二日以前にサント・アントーニオの砲戦で打つて了ひました。スツラチオーテのものどもまで、今では劍一つになつて砦の守備に立つことを承知しません……

ボルソー プリンチアルレの爲に、やられました城壁の裂目が、此の窓から見えて居ります……約五十歩の廣さで、羊の群が通れるほどでございます……あそこは、もう到底支へられません。ロマニヤ人、スクラヴォニヤ人、アルバニヤ人などは、今夜中に條約が調はなければ一團になつて逃走する氣色が見えて居ります……

ギドー 政府は此十日間に三度まで學寮の長老たちを派遣して、條約を締結させようとしたが、今だに一人も歸つて來ない……

トレルロー プリンチヴルレは副官のアントーニオ・レノーがこちらで虐殺せられたのを、其まゝに濟さないのです、逆上した百姓どもが、通りで首を切つて了つたのですから、フィレンチェ人は此の虐殺を口實にして、我々を法に背いたものだと言言するでせう、我々を野蠻人として遇するでせう……

ギドー 私は現在の父をプリンチヴルレに送つて、我々の深厚な悲みを表させた、そして餓に驅られて亂心した暴民を、到底我々の力で取り鎮めることの出來なかつた譯を説明させた。父は神聖な人質であつたのだ、それがまだ歸つて來ない……

ボルソー もう一週間以上も此の町は開放してございます、あらゆる方面が敵前に露されて居ります。城壁は廢墟の塊で、大砲は沈黙してしました。プリンチヴルレはなせ攻撃の命令を下さないののございませう？勇氣を失つたののございませうか、それとも伏兵でも恐れて居るのでございませうか。或はフィレンチェから何か、秘密の命令が來たのかも知れません……

ギドー フィレンチェの命令はいつまで立つても秘密だが、併し其の計畫は明白だ。ビザがヴェニスに對して堅く信義を守つてゐるのは、フィレンチェの小さい町々には危険な手本にある。だからビザ共和国は亡ぼさなくてはならない……そこでフィレンチェが非常な策略と權謀とを用ひはじめたのだ。謀をめぐらして段々この戰爭を激しくし、點詐と残忍の奇怪な所

行でそれを毒しようとしたのだ、それを頼みにして無慚な復讐を遂げようとしたのだ。ピザの百姓どもがレノーを虐殺したのも、フィレンチェの廻しものに教唆せられたかと思はれる理由がある。プリンチヴルレに此の城攻めをまかせたのも、やつぱりフィレンチェの策略の一部だつた。プリンチヴルレといへば、フィレンチェで雇つた軍人の中でも一番野蠻な男だ——ブラチエンザの奪略で、凡そ武器を取つたものは残らず斬つて了つて——後になつて、あれは自分の命令に背いてやつたのだと辯解をして——それから五千人の普通の女子を奴隷に賣つたといふ、悪い評判の男だ……

ボルソー さういふ話でございました、併しそれは正確ではございません。プリンチヴルレではなくて、フィレンチェの辯務官等が其の虐殺と婦人賣

買の責任者ださうでございました、私はまだプリンチヴルレを見たことはございませんが、私の兄弟のうちに、よく彼を知つて居るものがございます。彼れの血統は野蠻人でございますが、父はバスケ人かブレトン人で、ヴェニスで金細工の店を持つてゐたさうでございます。生れは卑しいに相違ございませんが、でも世間でいふほど野蠻ではございません。聞きました所では、随分危険な人物で、品行などに頓着しない、空想的な激烈な男でございますが、それに拘らず信義を守る點に於ては安心してこちらの劍を渡される男でございます……

ギドー まあ、お前の腕で持ち切れなくなるまで、劍を渡すことは待つ方がいゝ！ 其のうち今に彼奴がじつとして居られなくなつて、本性を現はして来る！ それから我々の方では、取るべき道が一つ残つてゐる、

少くとも死を恐れなくてそれに向つて突進しようとする我々には……さうだ、我々は軍隊にも市民にも、それから城内へ逃げ込んである百姓にも、凡ての眞實を打ち明けなくてはならない。條約の申出などはまだ受けてゐないといふ事を知らせなくてはいけない。我々はこゝで一種の擬戦をやつてゐるのぢやないからな。二大軍が朝早くから晩まで戦つて、戦場には手負が三人しか残らないといふ、まゝ事戦をしてゐるのぢやない。勝利軍がお客になつて、敗軍の隊へ名譽ある友人としてやつて來るといふ、兄弟づくの籠城ぢやない。死ぬか生きるの猛烈な争闘なのだ、其のあひだに慈悲といふやうなものは少しも無い、我々の妻子は……

(マルコー入り來たる、ギドーそれを見て走りより、熱心に抱く)

ギドー お父さん！……どうした仕合で、どうした不思議で、この不幸の

中に、どうした幸運のめぐりあはせで、あなたは歸つて入つしやつたか、私はもう殆ど絶望して居りました……手傷を負うては入らつしやらないか？ 足を引きすつておいでになるが、敵の爲に害をお受けになりましたか、どうしてお遁れなすつた？ 敵がどんな事をしましたか。

マルコー 何もしないよ。仕合せと、敵は野蠻人でなかつたよ！ 彼等はな、私を名譽ある賓客として遇して呉れた。プリンチヴルレは私の著述を讀んでゐたよ。それからあの私が発見して翻譯をしたブラトリーの對話篇が三篇ある。あれに就いても話してゐた。なる程私は跛足を引いてゐるが、それは遠い路をあるいたからで、其の上年を取つてゐるから……時に私がプリンチヴルレの營所で逢つたのは誰だと思ふかい？

ギドー 無慈悲なフレレンチェの辨務官ごもせう！

マルコー あゝあれらもゐた——え、と、少くとも其の一人はゐた、私が逢うたのはたゞ一人だつたからな……けれども私が第一に聞いた名はマルシリオ・フィチーノだつたのさ、あの、プラトーを初めて世界に知せた男よ……プラトーがマルシリオ・フィチーノによつて生き返つたといつてよい位の男よ……私はあの男に逢ふためなら、他のどこへ行くよりも先に私の生涯を十年でもそれに費したらうと思ふ。……二人は、やつとめぐり逢つた兄弟のやうだつたよ……ヘシオッドの話をする、ホーマーの話をする、アリストートルの話をする……それから、あの男はな、アルノー河の岸はづれで、營所から遠くない橄欖の森の中から、胴ばかりの女神の像を掘出したさうだ、何でも砂の中に埋れてゐたのだといふ、それが何とも言へない見事なものでな、それを見てゐると、戦争の事など

は忘れて了ふくらゐよ。私たちは其の少し先を掘り起して、あの男が腕を一本見つけるし、私が手を二つ見つけた……其の手がまた實に純粹で實に美妙で、幸福な笑ひを與へるために造られたといはうか、露を撒き曙を愛撫するために造られたといはうか……一方は優しく曲つて、女の胸にでもかけてゐたかと思える。一方は鏡の柄を掴んだまゝであつた……

ギドー お父さん、お父さん！ どうかお忘れなさらないやうに、人民は今餓えて死にかゝつてゐます。美妙な手や、體ばかりの銅像が何の役にも立ちません。

マルコー いや、それは大理石像でな……

ギドー 結構です！ けれども、それよりか三萬の人命を何うしたらいい、でせう？ 一瞬間時がおくれても、一點不注意な行動があつても、彼等

は滅亡です。たゞ一言で彼等を救ふことが出来るのですから、たゞ一口の吉報で……あなたが先方へお出かけなすつたのは、胴ばかりの石像や折れた手などのためではなかつたのです！ 敵はあなたに何と申しましたか？ 何ういふ計畫をしてゐるのですか？ フィレンチェは、プリンチヴレは？ 早く聞かせて下さい！ 敵はなせ斯う躊躇してゐるのでせう？ あ、窓下で叫んでゐる聲が聞えますか？ みじめな奴等が石の間に生へてる草を奪ひ合つてゐるのです……

マルコー さうだつたな、私は忘れかけてゐた、人間がお互同志戦をしてゐるあひだに、世の中は春になつた、嬉しうな空が地上に笑つてゐる。海は青空に續いて廣がつて、さながら女神が天の神々に捧げる杯のやうに輝いてゐる。そして地は人間に對する愛であんなに麗しく、あんなに

充ち満ちてゐる！……併しお前にはお前の樂みがある、私はあんなに自分の事にかまけ過ぎてゐました……それにお前の言ふことも當然だ。私はすぐにも聞いて來た報道を話さなくてはならなかつた……私の持つて來た使命はな、三萬の人々に對しては救ひであるが、或る一人に對しては重い苦みになる……併し其一人はな、私の見るどころでは、戦争のすべての光榮よりも遙に偉大な光榮を荷ふべき、非常に貴い機會をそれが爲に得るだらう……一人に對する愛も善いことで、それに伴ふ幸福もある、けれども多數を包擁する愛は更に偉大で更に美しい……すべての人の賞讃する美德も善いに相違ないが、いつか我々の眼が更に其の先へ走る日が來たら、其の美德の價値も減つて行く……これ、よく氣をつけて！……そして覺悟して私の言ふことを聞いて呉れよ、ひよつとしたら、私

が口を開く第一の言葉が、もうお前をして否應なし、一步も退くまいと誓はせて了つて、喜んで思ひかへすべき理性の力を縛つて了ふかも知れない……

ギドー (身振りて士官等を去らしめながら) あつちへ!

マルコー いやー 其のまゝにしておいで…… 是れから決めようとしてゐるのは、私たちの運命だ、私たちみんなの運命だ! 實のところ私は此の部屋一ぱいに、其の救つてやらうとする犠牲の人たちが、溢れて居ればよいと思ふ。慰めてやらうとする、其の哀れなどもがらが、残らずあの窓のところに來てゐて、私が齎らす報告を聞いて呉れ、ばよい、そして永久にそれを記憶して呉れ、ばよい。私は救ひを齎したよ、たゞ理性が承知してさへ呉れ、ばよいが。一萬の道理もたゞ一つの過に比べて

重さの足りない事がある、其の重さに引かれさうで、私自身が……

ギドー 謎のやうな事は止めて下さい、お父さん、お願ひです! どうしてさう言葉敷を多くなさるのです? みんな言つて下さい! もう何も恐れる事はありません!

マルコー さうか! ではあ! 私はプリンチブルレに逢つて、話して來ましたよ…… 不思議なもので、世間が恐れてゐる人の事を傳へると、まるで違つた形にしてすふ…… 私は昔のプリアム王がアキリスの陣屋へ行くやうな氣持で、あの男の所へ出かけた。亂酒漢の血なまぐさい野蠻人に逢ふつもりでな—— 戦争をするのが唯一の能である狂人に逢ふつもりでな…… そんな風にいつも私は聞いて居たから…… 戦争の鬼のやうな、片

ナンヂ、ナンモ

意地な、亂脈な、放埒な狡猾残忍な男に逢ふつもりでな……

ギドー その通りの奴です、たゞ謀叛人だけではないかも知れませんが！

ボルソー はい、謀叛人ではございません、フィレンチェに仕へて居りますが

忠義は全くして居りますので……

マルコー

私が逢ふと、その男は私の前に頭を下げた、その様子が、さながら

私の弟子で、もあるやうに、私を先生として尊敬してゐた、なか／＼の

學者でな、勉強家で聰明で熱心で、研究心に富んで居て、じつと人の説

も聴くし、美しいあらゆるものに向つて两眼を開いてゐる、人情に篤く

寛大で、戦といふ者を好かない、良心が強く、真率で、非道な共和国に

仕へてゐるのは本意でないらしい、此の世の行きが、り——運命とも言

ナンヂ、ナンモ

はうか——それがあの男を軍人にして、其のまゝ名譽の中に囚へて了つた、それをあの男は悪んでゐて、いつでも喜んで投げすてる、たゞ併しあの男に一つの願があつてな、それがかなはない中はその様な事をしない。その願といふのが激烈な願で、たとへば高大な、無類な、手も達かないやうな危い愛の星の下に幾人か生れた人間の願と言ひませうか……

ギドー お父さん、お父さん、あなたは餓えて死にかゝつてゐるものどもがいつまで斯うして引つぱられてゐるか、お忘れなすつた——プリンチブルの性質がどんなだらうが、それが我々に何の役に立ちませう？

あなたを救ひださおつしやつた、それを早く聞かして下さい！

マルコー もつともだ、長びかすのは私が悪い。たとひ是れが私に取つては地上の誰れよりも大事な二人のものに残酷な事であらうとも……

ギドー 私（わたし）の受けるものは受けます、たとへ何んな事（こと）であらうとも。
たゞ其（その）の今（いま）一人（ひとり）といふのは誰（た）れです？

マルコー 聞いて呉（く）れ、話（はな）さうから……私（わたし）はな、此（こ）の部屋（へや）に這（はい）入（い）つたとき、
何（なん）とも言（い）へない、堪（た）え難（がた）い氣持（きもち）になりました。が、救（すく）ひといふものを目（め）
の前（まへ）に見（み）て、それ（それ）に氣（き）を取（と）られて了（しま）つた。

ギドー お話（はな）しなさい？

マルコー フイレンチェは我（われ）々（々）を皆（みな）殺（ころ）しよう（しよう）と決（けつ）心（しん）してゐる。軍（ぐん）總（そう）督（とく）等（ら）はそ
れが必（ひつ）要（よう）だと決（けつ）定（てい）して、議（ぎ）政（せい）官（くわん）も其（その）決（けつ）議（ぎ）を承（しょう）認（にん）した。もう取（と）りかへし
のつかぬ決（けつ）議（ぎ）になつてゐる。けれどもフイレンチェはなかく用（よう）心（しん）深（ふか）く
て偽（ぎ）善（ぜん）の道（みち）に賢（かしこ）いから、之（これ）から自（じ）分（ぶん）の文（ぶん）明（めい）に入（い）れようといふ世（せ）界（かい）に對（たい）
して、うつつかりした口（こう）實（じつ）は與（あた）へない。自（じ）分（ぶん）等（ら）の戸（こ）口（く）で無（む）差（さ）別（べつ）な虐（ぎやく）殺（ころ）を行（おこな）

つたといふ非（ひ）難（なん）の口（こう）實（じつ）を與（あた）へない。彼（かれ）等（ら）の方（ほう）から申（まを）し出（だ）した寛（くわん）大（だい）な條（じょう）約（やく）
を我（われ）々（々）が拒（こは）んだと宣（せん）言（げん）して、此（こ）の町（まち）に總（そう）攻（こう）撃（げき）をかけるだらう、スベイン
人（にん）やドイッ人（じん）の雇（や）兵（へい）どもを押（お）し寄（よ）せさせる。それも急（いっ）須（す）無（む）い。そ
のうちには掠（り）奪（だつ）も出（で）来る、火（ひ）もつけられる、分（ぶん）捕（と）をする機（き）會（かい）も虐（ぎやく）殺（ころ）を行（おこな）
ふ機（き）會（かい）もある！口（くち）輪（りん）をゆるめてさへやれば、それでよい。頭（かしら）だつた連（れん）中（ちゆう）
は其（その）日（ひ）は氣（き）をつけて、自（じ）分（ぶん）等（ら）の力（ちから）に及（およ）ばぬ風（ふう）をして居（を）る、統（とう）御（ご）力（りき）を失（うしな）
つたといふ風（ふう）をして居（を）る……是（こゝ）れが我（われ）々（々）に對（たい）して仕（し）組（く）まれた運（うん）命（めい）なのさ。
そして此（こ）の紅（べい）百（ひゃく）合（ごう）の都（みやこ）が、まづ先（まづ）にその禍（わざはひ）に苦（くる）んで、一（いち）圖（と）に外（がい）國（こく）の雇（や）兵（へい）
どもが、思（おも）ひがけない放（は）擲（てつ）の結果（けつ）果（くわ）だとして了（しま）ふであらう、そこへフイレン
チエ人（じん）がで來（き）て、さもく怖（おそ）ろしいといふ様（やう）子（す）で、是（こゝ）れ等（ら）の雇（や）兵（へい）どもを解（かい）散（さん）
して了（しま）ふ。そのとき（とき）にはもう、此（こ）の町（まち）は亡（ほろ）びて了（しま）つて、何（なん）等（ら）雇（や）兵（へい）ども

力を借りる必要はなくなつてゐる……

ギドー さうです、それがフィレンチエのやり口です……

マルコー 斯ういふ秘密の命令を、プリンチブルレは共和国の辯務官から受けてゐる。この一週間といふもの、毎日最後の攻撃を開始するやうにと迫られてゐる。それをさまざまの口實でこれまで延して来た。それから、プリンチブルレは幾通かの手紙を取り押さへた、それによると、辯務官どもがあの男の一舉一動を偵察して、叛逆といふ名で議政官に訴へてゐます。ビザは亡びる、戦争は終る、フィレンチエであの男を待つてゐるものは罪科と刑罰と死の外はない。昔から危険と見られた大將は皆その通りであつた。プリンチブルレは自身でよく此の運命を知つてゐる。

ギドー 分かりました、それであの男は何を申し出しましたか？

マルコー プリンチブルレの信するところではな——少くとも狡猾な野蠻人どもに對して信じられる範圍で——あの男が取り立て、やつた弓の兵も可なり多い。併し何んな事があつてもあの男に一身を捧げてゐる護衛兵が百人はゐる、是等の兵には全然信賴することが出来るさうだ。そこであの男の條件はな、附いて來るだけの人数をすつかり引きつれてビザの町へ這入らう、そして今までの自分の軍に對して、ビザの爲に防戦をしよう……

ギドー こちらは兵を求めて居るのでありません、そんな危険な援兵などに心を動かしてなるものか、彈丸と糧食と彈藥をよこさせませう。

マルコー プリンチブルレも自身の申出が、お前に疑はれるだらうといふ事を豫想してな、多分拒絶せられる事と考へてゐました。その爲、こちらへ

三百輛の貨車から成る輸送隊を入れようと云つて居る。その貨車は軍用品と食物とを積み込んで、ちやうど向ふの陣營へ来たばかりださうだ。

ギドー どうしてそんな事が出来るのでせう?

マルコー 私は知らない、戦争と政治の道は私には分らない。たゞあの男は自分のしたいと思ふことをする……フイレンチェの辨務官どもに頓着なく陣中ではあの男が最上の主君だから、議政官等がああ男の司令權を剝がない限りはな、そして議政官等もちやうど今軍隊がああ男を信頼して、規つた獲物を擱まうとしてゐる勝利の間に、そんな事をする勇氣は無いからフイレンチェは時機を待たなくてはならない!

ギドー よろしい、分りました、あいつは自分を救ふために我々を救ふのですね、復讐を求めてゐるのですね。だが、それならもつと違つたやり

方で、もつと巧みに目的が達せられさうなものだ。敵を救ふために何ういふ利益があるのでせう? 何處へあいつは行くつもりでせう? 自分は何うならうといふのでせう? 一體何を報酬に求めるのでせう?

マルコー ギドーや、いよく時が來ました、言葉が殘忍になる、強い力を持つて來る、二口か三口の言葉が、忽然として運命の力を持つて來る、そして其の犠牲になるものを擱んで了ふ、さういふ時が來ました……私の聲の響き、私の話方一つが、それ程多數の人命を殺しもすれば活しもある、それを思うて私は戦慄して居る……

ギドー なせ躊躇なさる? どれほど殘忍な言葉でも、我々の此の不幸に比べれば何でもありません……

マルコー 今も言つた通り、プリンチブルは聰明な男のやうだ、理性があ

る、人情がある、けれども如何に聰明でも、一點愚な所のない人間といふ者が何所にあらう、如何に善人でも、心の中に道ならぬ考を嘗て宿した事のない者が何所にあらう？……我々の理性や惻愷の心や正義の心は永久に欲望と戦ひ感情と戦ひ、此靈魂の傍についてゐる狂熱と戦つてゐるでないか？……私自身、何度か其の前に平伏して了つた、此の後もさうであらう、そして恐らくお前もまた其の通りになるだらう……みんなさうなるのが、我々の身の上だから……で今、一つの悲みがお前を待つてゐる、けれども恐らく其の悲みは、お前が正しく考へてさへ呉れたら、悲みにならないだらう……それから私は、明に、その悲みが、原因に不釣合のものだと認めながら、自分では其の愚な悲みよりも、もつと愚な約束をして來ましたよ……そして其の愚な約束を、私は聖人となつて喜んで

で守つて行く、理性の名で物を言はうとしてゐる聖人として……萬一お前が此の條件を拒むなら、私は敵の營所へ歸つて行かうと決心した。さうなつたら、先方で私が何うなるか、死と刑罰が私の世間並はづれた信義の報になることは疑ないだらう……それでも私は行かなくてはならぬい……自分自身に對しても、私はたゞ自分を惑はすために愚なことを尊い紫の色に塗り立て、居るに過ぎない。けれどもやつぱり私は、その悲むべき愚なことをしなくてはゐられない。つまり私も、力といふものを缺いてゐるのだ、理性の言葉にのみ耳を貸さうとするものが必ず持つべき力といふものを……そこで、私はまだお前に言はなかつたが、あ、御覽、私は言葉の緒を失つて了ふ、どうして斯う文句に文句をつなぎ、言葉に言葉を重ねるのであらう？ 最後の一言を言ふまいと僅かばかりの

時間を延ばしてゐるのだらう？ けれども私はお前を疑ひすぎて、申譯のない事をしてゐるかも知れない……まあ考へて見て呉れ！ 私が現に見て来た、あのすばらしい輸送隊、穀物と葡萄酒と果物とを積んだ、あの無数の荷車、何十頭といふ羊や牛の群は、人民のために幾週間の食物を給して有り餘るほどだし、何十箱の弾薬、何十層の鉛は、フィレンチエ人を打ち破つてビザの好運を取り返すに充分だ。これだけの物が今夜中に此の町へ運び込まれるのだ。たゞお前が其の報としてプリンチブルレの手許へあれを送り届けてさへ呉れ、ば——そして夜明の第一の光りを合圖にあれば歸つて来る——もつともプリンチブルレは勝利と征服の標に、あれが唯一人外套を着たけで来るやうにと要求して居るよ……

ギドー 誰れがです？ 行くといふのは誰れです？ まだそれを仰しやら

ない……

マルコー ジョ・マンナが。

ギドー ええ！ 私の妻が？……マンナが？……

マルコー あい、お前のマンナを……どうく私に言ひました！

ギドー しかし何うしてマンナを？ 女は他に何千でもゐるではありませんか？

んか？

マルコー 其の中でマンナが一番美しい、そしてプリンチブルレはマンナを

愛してゐる……

ギドー あいつがマンナを愛する？……何所でマンナを見たのでせう？

知つて居る筈はない！

マルコー プリンチブルレはあれを見ましたし、知つても居る。けれども何

時、何うして見知つたかは言はない……

ギドー　でも、ブンナは、あれはあいつを見たのでせうか？　何所であれ
らは出會つたのでせう？

マルコー　ブンナはあの男を見た事はあいよ、少くとも、あれはそれを記憶
してゐない……

ギドー　何うしてそれを御存じです？

マルコー　あれが自身でさう言ひました……

ギドー　何ですと！

マルコー　私がこゝへ来る前にさ……

ギドー　で、ブンナにお話しなすつたか？

マルコー　残らず……

ギドー　ええ！　あなたは、よもや此の不名譽な取り引を、あれに勧めは
なさらなかつたらう？

マルコー　勧めました。

ギドー　それでブンナは？……

マルコー　何にも言はなかつた……顔の色がさめて、出て行きました……

ギドー　あゝ！　さうなくては……あなたの足元に身を投げてあなたを言
ひ罵るよりは、其の方がまだよかつたのでせう……さうです、顔の色を
かへて出て行つた……天の乙女もさうするでせう、ブンナらしい仕方
す……何を言ふことがありませう？　何もない！　私たちも何も言ひま
すまい……さあ、諸君、また守備に就かう、そして、死なう、少くとも
死ななくてはならないわれ……だ、そんな不名譽に身を汚してなるもの

か。

マルコー お、ギドーや、つちい境遇に立つてゐるといふ事は、私もよく知つて居る！ が、それが身の上に着ちかゝつて来た以上、忍耐が大事だ。理性に思ひ直す時間を與へて、義務と私情の悲みとを、はつきり區別させて呉れ……

ギドー 義務ですと！ 私の義務は明白です、あなたの其の奇怪千萬なお話が、否應なし一つの義務を私に押しつけます、たゞ一つの義務を。この上思ひ直す時間の必要はないのです。

マルコー いや。やつぱりお前は、自身に聞いて見なくてはならない。人民を擧げて犠牲に供する権利がお前にあるか、数千の人命をそれに代て願みないのは、あんまり高い價でないか……お前の幸福がたゞそれのみに

存して居るといふのなら、お前が寧ろ死を選ぶといふ譯も分からうが。もつとも私はもう人生の終りに近づいて居る。人間も澤山見て来た、人生の悲みも澤山見て来た。私に取つては、どんな害悪も、死といふ事に比べれば、みんな勝つてゐる。あの冷い怖しい死といふものに這入れば永久に黙つて了ふ……そこで今、幾萬といふ人命が危機に瀕してゐて、それがみんな武器を取つたお前の同胞等の身の上だ、其の妻や子の身の上だ！ お前が一狂人の狂態をさへ許してやれば、お前に取つて奇怪に見える事が、後の人の眼には勇敢な事柄として稱へられるだらう。後に來るものは、一層冷静な眼で見えて呉れる、一層正しい、一層人情のある心で捌いて呉れる。考へて御覽、人の命を救ふほど貴い事はない。美德も理想も、名譽だ信義だと呼んでゐるものも、みんなそれに比べれば物

の数でもない……お前は此の苦境を、勇士のやうに、少しの汚れも受けないで通過したいであらう。けれども死といふ事が勇氣の最高の頂だと思つては間違になる……一番勇敢な行爲は、一番我々に困難な事をする事だ、死はしばらく生よりも遙に容易いものだ……

ギドー あなたは私の父上でせうか？

マルコー お、お前の父たる事を誇りとしてゐるものだ……が今日、私は

お前に反對する、其の結果私自らにも反對してゐる、若しお前が、あんまりたやすく私の言ふ通りになつて呉れたら却つてそれ程お前を大切に思はないかも知れない……

ギドー あ、あなたは私の父上だ、よい證據を見せて下すつた、あなたも自身の境遇として死を覺悟してゐらつしやる。私が此の惡むべき條約

を拒めば、あなたは敵の營所へ歸つていらつしやる、そしてそこでフィレンチエがあなたの爲に取つて置いた運命にお出あひなさる。

マルコー ギドーやそれはな、私一人の身上だから——幾ばくも餘命の無い弱い、無用な、何の値打も持たない一老人の私だから——やつぱり昔氣質の愚かさを守つて、眞に聰明であらうとするものが取るべき道は行かないでもよいかと思つたが……私が必ず先方へ行かなくてはならないといふ譯はない……私の靈魂はこの老いぼれた體に不似合なほど若くてゐる、私はこれでもまだ理性が口を利かない時代に屬してゐる……併し悲しい事には、無数の過去といふものゝ力が私を引きとめて、あの愚かな約束を破ることを妨げる……

ギドー 私もあなたの爲さるやうにしませう……

マルコー

どいふと？

ギド

あなたの例にならひませう。私もあなたがくだらないものだと思しやる其過去といふもの、力に服しませう、あなたも仕合せとまだ其の力に支配せられておいでなさる。

マルコー

他人の身に關する事なら、私は過去の力を投げすてるよ、それにお前の魂は私の力で勵まされようとしてゐる、私の約束した言葉を食し犠牲にして、お前を勵ます必要がある。私は心からあの約束の實行を斥ける、そして、何とでもなれ、どちらにでも決めて呉れ、私は先方へ歸らない事にする……

ギド

澤山です！ 子として迷つてゐる父に言つてならない事もある……

マルコー

言ひたい事は言つて呉れ、憤りの言葉も自在にお前の胸から溢れ

させて呉れ、私はみんな夫をお前の至當の嘆きとしてあやしまない……が、たい私を呪ふあひだも、理性と寛かな慈悲の心はお前の靈魂の中に留めて置いて、吐き出す呪ひの跡を埋めて呉れ……

ギド

澤山です、もう聞きたくありません……お考へなさい。篤と考へて御覽なさい、あなたは私に何をさせやうとなすつたか、差しあたり理性を缺いてゐるのはあなたです、貴い高い理性を缺いてゐるのは。あなたの智慧は死の恐れで晦まされてゐる……私は死を恐れない……私は今もおぼえてゐます、あなたがまだ老年と無益な書物の研究で勇氣を失つてお了ひなさらない以前、あなたから勇氣をつけて貰つた事のあるのを、記憶してゐます……此室には私等しか居ないから、誰れもあなたのみじめな弱い様子を目撃したものはありません、私と二人の副官等は、秘密

を守ります、其の秘密も、かはいさうに、もう長くは守る必要がないでせう、一切の事は我々の胸に葬つて置いて、さあ、最後の奮闘にかゝらう……

マルコー いや、ギドーや、それは葬られません、お前がそれ程無益だといふ年齢と學問とが、私にはさう教へて呉れた、理由は何とあらうが、一人の生命を葬るといふことは決して正當のことぢやない、それから實際私はもう、お前の眼に唯一の大事と見られる、勇氣といふものを持つてゐないが、併し私には今一つ他のものがある。勇氣ほど華々しくないかも知れないし、多くの場合、人といふものは、苦みを與へるものを稱讚する、さういふ功能は少いかも知れないが……其のお蔭で私は残つゝる義務を果したいと思ふ……

ギドー それはごんな義務です？

マルコー 初めは至つて不成功であつたが、でも私は此事を完成したいと思ふ……お前も判決者の一人には相違ないが、併しお前一人ではない。死生を此の時にかけてゐる人々は、みんな彼等の運命を知る権利を持つてゐる、あれ等の救ひが何に基いてゐるかを聞く権利を持つてゐる。

ギドー あなたのおつしやることが分らない、少くとも分りたくありません。あなたのおつしやるのは……

マルコー 此の部屋を出るとすぐさま、プリンチブルレの申出とお前がそれを拒んだ次第を人民に告げやうといふのさ……

ギドー よし、分かりました、くだらない言葉をかはしてゐる間に、こんな結果になつたのは残念です、同時に、あなたの迷ひが、あなた方の年

配の人についてゐる尊敬を無くしてしまふのも残念です……併し迷つた父なら、其の意志に逆つても保護するのが子供の義務です、のみならず、ピザが存する限り、私はこゝに主人として立つゐる。ピザの名譽を擁護するのが、私の任だ……ボルソー、トレルロー、君等は父上を監視して呉れい、父上の良心が覺醒して来るまで。それで他には何事も無かつた事にする！ 誰れにも此の事は知らすな……お父さん、私はあなたを許してあげます、あなたも私を許して下さるでせう。嘗てあなたは、私に自分を支配する人になれと教へて下さつた、恐れない人になれと教へて下さつた、結局、あの事を思ひ出して、私を許して下さるでせう……

マルコー いや、私はお前を許す爲にそんな結局まで待つ必要はないよ……私もお前と同じやうにすればよい……それからお前は私を監禁すること

は出来ても、私の秘密を監禁することは出来ない。それは私の自由で、もう押へることが出来ないのだから……

ギドー 何の事ですか？ 何をおつしつやる？

マルコー ちやうど今頃、プリンチブルレの提供した條件が、政府で議せられてゐるといふ事さ……

ギドー 政府で！ 誰れが政府へ知らせました？

マルコー 私が知らせた、こゝへ来る前にな……

ギドー あなたが！ いや、いや、そんな事の出来やう筈がない！ いかに怖氣づいたからと言つて、老耄したからと言つて、あなたはよもや、私のたゞ一つの心の喜びを、私の愛を、私たち夫婦の純粹な美しい生活をよもや他人の手に委ねはなさるまい、あの惘れむべき町人共の手に。

あいつ等は、愛も喜びも、たゞ、鹽や油と同じやうに秤にかける儂です……そんな事をなさらうとは信じられぬ……眼のあたり見る迄は私は信じない……眼のあたりに見たら、その時は、父として愛も理解も崇拜もしてゐたあなたを、恐れと憎みの目で見るでせう。こんな禍を今日ここに惹き起した張本人の、あの卑劣卑怯な悪魔めに劣らないあなただと思ふでせう！

マルコー お前は本心を語つてゐる、私といふものが分かつてゐないのだ。もつとも其の責は私にある。老の波が私の身に寄せてから、はじめて私は日に……愛と人生の事を知り、人間の哀樂について學びました。それをお前に知らさなかつたのが悪い……若し私をもつと早く心の變化を話して、虚榮の次第に消えて行くことや、真理の見えて来る様子を言つて

置いたら、今日斯うしてお前から、縁もゆかりもない不幸な人のやうに取扱はれて、嫌はれて行く憂は無かつたらう……

ギドー 少くとも早くあなたの事に気がついたのを喜びます……其の他には……政府が何う決議するかといふことは豫想するに難くない。自分等を救ふ唯一の道は一人の人の人を犠牲にすることだ……單純極まつた話だ！斯んな誘惑があれば、あの憫むべき町人どもが分相應に持つべき勇氣よりも、遙に高尚な勇氣ですら曲げられて了ふ。だが、あいつ等も氣をつけるがい！ あんまり無理な要求をする、あいつ等が要求する權利以上の要求だ。あいつら等の爲に、私は私の血を濺いだ、日となく夜となく、私は苦勞も忍耐もした、此の長い籠城のあひだ、私は嘗て自分の身を惜んだ事はないが、併し、それで澤山だ、もう私は何も爲ない！

ナンブは私のものだ！私の所有だ、それから私はなほ司令權を持つてゐる！少くともストラヂオーテの兵どもは私に忠義をつくして呉れる、私一人の命を聽いて、臆病者等の相談に耳を貸さないものが三百人は居る！

マルコー ギドーや、それはお前が過つてゐる。ビザの政府や、お前の賤む市民たちは、自分等の決議がどうなるかを知らない前から、この危急の場合に驚くべき立派な勇氣を示して居る。一婦人の愛を犠牲にして自分等の安全を計ることを拒んでゐる。で、私がこゝへ來た後で、あの人は、ナンブを呼んでビザの運命をナンブの手に委ねました……

ギドー 何だど！そんな事をしましたか！私のゐない所で、あの憎むべき獸めが言ひ條をあいつの口から繰り返したのですか！ナンブよ……

一目見られても紅くなるその優しい顔と、美しさのまさり行く、そのしとやかさで、ナンブはあの淫な老人どもや蒼い顔をした小さい偽善者の町人どもが前に立たされたか、あいつ等は不斷あれを神聖なものやうにして居やがつたが！そのあいつ等がナンブに對して「行け、裸でただ一人、あの野蠻人の營所へ出かけて行つて、そいつの言ふまゝになつて來い！」と言つたのだらう！あゝ、あゝ、暴力を用ゐなかつただけが、なるほど、まだしも立派な事だ！私がまだ斯うしてこゝに居ることを知つてゐるからね。あいつ等はナンブの承諾を乞うたのだらう！

それで私の——一體私の承諾を誰れが求めやうとするのだ？

マルコー 私が、求めたではないか、ギドーや、それで従かなければ今度はあの人たちが來る……

ギドー 来させて下さい！ ヴンナは私たち二人の意志を言つたでせう……

マルコー どうかさうしたいと思ふよ、お前もあれが答へに同意して呉れ……

ギドー あれが答へ！ それに疑がありますか！ あれほどよく知つてゐて、あれ程毎日逢つてゐたあなたが、ヴンナの答に疑ひをお持ちなさるか、兩眼に愛の笑を湛えて、始めて此の部屋を跨いだ、その部屋であなたはヴンナを賣らうとなさる、あれの答を疑つておいでなさる……

マルコー これギドーや、我々はな、お互にたい他人の上に自分の姿を見るものだ、自分自身の心の届くだけしか自分も分らないものだ……

ギドー たしかに其のためです、あなたなんぞの心が私に分からなかつたのは！ 併し私の眼がこの上また欺かれるよりは、いつそ神に禱つて永久につぶした方がましです！

マルコー 其の眼はちやうど今大きな光の下に開かうとしてゐるかも知れぬ……といふのはな、ヴンナにはお前の眼に入らない或る力がある、それを見て、私はヴンナの答は、もはや疑ふ餘地のないものだと思ひました……

ギドー 疑ふ餘地がない！ あゝ、たしかに私もさう思ひます！ だから私は前以て躊躇なくあれの答に盲従して置きます！ 萬一ヴンナの答が私と違つたら、私等二人はそもくから此の悲惨な間際まで、お互に欺かれてゐたのです……私たちの愛はほんの偽りに過ぎなかつたのです、微塵になつて了ひます。私があればに對して崇拜してゐた事は、みんな、たい此の信じ易い哀れな私の頭でこしらへたものに過ぎなかつた、此のかはいさうな義理固い胸が、たい一つの幸福を願つて幻を崇拜してゐた

のです……

(ワンナ、ワンナといふ叫び聲が戸外の群集から揚がる、初めはつぶやく様に、そして段々高く／＼なつて行く。正面の戸が開いて、ワンナ唯一人、室に進み入る。顔が蒼白く見える其の間多勢の男女が、室に入ることを恐れるやうに、戸にすがつて隠れやうとする。ギドーはワンナを見てはげしく駆け寄り、兩腕をワンナに投げかけて狂熱的に抱く)

哭

ギドー あゝ、ワンナ……あいつ等が何をしたか、あいつ等か何を言つたか！……いや、／＼、言はないでおいで……私はずいとお前の眼を見やう——あゝ、まだ、みんな純潔な、貞節なままだ、天の乙女が浴びてゐる泉のやうに……あゝ、あの馬鹿な奴等が！ あいつ等は私の愛するものを何うすることも出来なかつた、小供のやうに、空に向かつて石を投げて、天まで達くと思つてゐやがる！……じつとお前の眼を見たとき、あいつ等の言葉が唇の上にいぢけて了つたらう……お前は答へる必要もな

く、たいあいつ等を見てやつたらう……それだけで、あいつ等とお前の間には、あいつ等とお前の心の間には、湖水が出来たらう、愛と人生の限りもない海が出来たらう……けれども御覽、こゝに一人の人がゐる、父と呼ぶ人がゐる……頭を垂れて、白い髪の毛に蔽はれてゐる……私たちは此の人を許してやらなくちやならない、年を取つて、眼が見えない、慈悲をかけてやらなくちやならない、つとめてさうしてやる必要がある。お前の眼は何も此の人に言つてゐない——私たちはすべて離れた人だ？ 縁もゆかりもない人になつた。私たちの愛は、四月の群雨が堅い石の上に濺ぐやうに、此の悲しい老人の上を通り過ぎて了つた……そんなものは、もう此人に取つては何でもない、みんな消え失せて了つた。私等は愛といふ言葉の意味も知らないで愛してゐるのだと思はれた……分

哭

ナンブ、ナンモ

いのだ、説明の言葉があるのだ……言葉聞かせておやり、お前の答を！

ワンナ (マルコーに近づき) お父さま、私は今夜まゐります。

マルコー (ワンナの額に接吻しながら) 娘や、私は知つてゐました……

ギドー 何！ お前、何を言つた？

ワンナ あなた、私はまゐります、行かなくちやありません、従はなくち

やなりません……

ギドー 従ふ？ 誰れに従ふ？ 言つて御覽！

ワンナ 私は今夜プリンチブルの營所へまゐります……

ギドー あいつと死ぬるつもりでか、あいつを殺すつもりでか！ それは

私に氣がつかなかつた。さうだくそれで分かつた！

ワンナ あれを殺さうとしたら、ビザの町は救はれますまい……

ギドー ええ！ お前、お前は、それでは彼奴を愛してゐるか！ 何時か

ら彼奴を愛してゐるか？

ワンナ 私、その人は知りません、一度も見たことがありません。

ギドー でも聞いたことはあらう。さうだく、お前は聞いたことがあら

う、人が言つて聞かせたらう……

ワンナ いゝえ、少しも、ちやうど今、誰れかゝさう言ひました、大層年

とつてゐるさうです……

ギドー 年を取つちやゐない！ 若い、綺麗だ、私よりも、すつと若い。

あゝ、あいつの望が他の事だつたら、何であらうと、私はあいつの所へ

行つて、手と膝で這ひつくばつても、此の町を救つてやらう！ さうで

ナンブ、ナンモ

ないなら、私はナンダを連れて流浪して、誰れにも知れず、世間から、忘れられて、大道の辻に袖乞をしても餘生を送らう！……けれども此の事だけは、此の事だけは！世界の歴史で、いつ、征服者が斯ういふ事を——（ナンダの方に行き、兩腕を捲いて）あゝ、ナンダ、ナンダ、私は信じられない！私の聞いたのはお前の聲ぢやない、お父さんの聲だ、ただそれだけだ！いや／＼私は何も聞きはしない、すべて舊のまゝだ……さう言つて呉れ、私の間違だと言つて呉れ。愛はお前のすべてであつた、その愛で頬を染めながら、「行かない、行かない」と叫んだと言つて呉れ！私は何も聞かなかつた、沈黙はもとのまゝに續いてゐる……けれども、御覽、今こそお前が口を開かなくちやならない……みんな謹聴してゐる……誰れもまだ何も聞かない……みんなお前の言ふ言葉を待

つてゐる、さ、早く言つて呉れ、ナンダ、お前といふものを知らせるために！私等の愛を宣言して呉れ、それで此の夢を破つて呉れ、私が望む通りの言葉を言つて呉れ……其の言葉一つで、廢滅の中に崩れ込む私の周囲を防ぐことが出来る！

ナンダ おゝ、あなた、我慢なさるのがつらいでせう、察してゐます……

ギドー（我れ知らずナンダを突き離して）つらいでせう！お前にも分かつてゐるか、お前にも分かつてゐるか。我慢して來た私には愛がある、お前は初めから私を愛してゐなかつた！愛してゐなかつた、それが私に分りかけて來た！一體何うすればいいのか！……お前は喜んで私を棄てようとしてゐる。あの男を愛してゐるのだ、誰れが嘘だといはう！あゝ、併し私はまだ主人としてこゝに立つてゐる、誰れが何と言はうと！それを

お前は、私が静に傍観して成行にまかせてゐると思ふのか！ 此の部屋の下には穴牢がある、暗い、冷たい穴牢だ、あそこでお前はじつとしてゐるが、ストラチオーテの兵どもに番をさせて置く、お前のその義勇主義の夢がさめて、どこにお前の義務があるか分かるまで、あそこにゐるが、……ナンブを連れて行け……屹度言ひ渡したぞ、私の命令だ、行け、服従せよ！

ナンブ あなた、あなた、私が言ふまでもない事ぢやありませんか……

ギドー 誰れも命令に服しないな？ 茲にゐるものは一人も私の命令を行はないな！ ころ、ボルソー、トレルロー、君等の腕は石にでもなつたか？ 私の聲が通らなくなつたのか？……そつちに居る他のものも、立つて謹聴してゐるが、みんな私の言ふ事が聞えないか？ これほど叫んで

ゐるのに、身動きもしない……ナンブを連れて行けといふに！ あちらへ、あちらへ！……あ、分つた！ みんな恐れてゐるな、生きたいのだ——生きたい、それがみんなの望みなのだ！ あれ等を生かすために、私は死ななくちやならない、併し斯うしては死なない！……さうだ、是れではたしかに容易すぎる……斯うして私は、たゞ一人群衆を相手にしてゐる、そしてそれ等の爲に私が償ひをしなくちやならない……なせ私がそれをして、貴様等はしないのだらう！ 貴様等も皆な妻を持つてゐる！……（劍を抜きかけながら、ナンブに近づき）若し私が不名譽にかへて死を選んだら何うするか？……貴様等にそんな事は思ひつかかなかつたらう！……併し、それ、私が手をさへ上げれば——

ナンブ ねえ、愛の力でなさるのなら……

ギドー 愛の力でなさるのなら…… あゝ、さうだ、愛といへ、お前は今まで愛といふ言葉の意味を知らなかつた！ お前は、お前の魂には、ついで愛といふものがなかつた！ 斯うしてお前を見ると、砂漠を見るやうだ——何もかもみんな吸ひ込まれて、死んで了ふ……一滴の涙もない、一滴の涙もない……私は何だつたらう、私はお前に取つて何だつたらう！ 腕に宿りを貸してやつた唯の人、それだけだ！ お前がたゞ一瞬間でも……

ヴンナ あなた、よく私を見て下さい！ 見えませんか？ 何と言つたらいいでせう？ 私の感情を語る言葉があるでせうか？ たゞ一言本當に言つても、私の力はつきて了ふ！……言へない……私はあなたを愛してゐます、みんなくゝあなたのものです！ でも、やつぱり私は行きます、

行かなくちやならない、行かなくちやならない……

ギドー (ヴンナを突き放しながら) それがいゝ！ 行け、あつちへ行け、あつちの方へ行け、私はお前と縁を切る。行け、もうお前は私のものぢやない……

ヴンナ (ギドーの手を掴みながら) あなた！

ギドー (ヴンナを押ししのけ) あゝ、その温い柔かな手で私にさはつて呉れるな……お父さんの言葉が本當であつた、お父さんには、私よりもよくお前が分かつてゐた……お父さん、茲にヴンナがゐます、斯うなつたのもあなたの細工です、仕舞までそれを仕上げて下さい……ヴンナをいつの營所まで連れて行つて下さい。私はこゝに残つてゐて、二人出て行くところを見て居らう……けれどもヴンナに代へたパンと肉とを、私が分

けて貰ふと思つてはなりませんよ……私のする事はだゞ一つです、今すぐに分かるでせう……

ナンナ (ギドーにすがりつきながら) あなた、私を見て下さい、眼をそらさないで——さうされると恐しくなりますから……あなたの眼を見せて下さい

……

ギドー では御覽！ よく此の眼を見て、意味を讀んで御覽……出ておいで、もうお前といふものは私に分からない！ 時刻が迫つて来る——あそこであいつが待つてゐるやよ、日は暮れかゝつて来た……行け、何が恐しい？ 私は自殺はしない、狂人ぢやない、理性のぐらつくのは愛が勝つた時ばかりだ、愛の亡びた時にそんな恐れはない……私は愛のどん底まで見通した、さうだ、愛と貞操のどん底まで……もう、何も言ふこと

はない。いけないく、お前の指を廣げて了へ。いくら掴んでゐても消えて行く愛は引き留められない。萬事終つたのだ、完結した、すんで了つた、一毫の跡も留めない！……過去は離れて了つた、未來も離れて了つた……あゝ、さうだ、その純白な手の指、その貴い眼、その唇一度は私もそれを信じたが……もう何も残らない……(ナンナの手をはれのけ) 何も、何も、全く何も！ さやうなら、ナンナ、行け、さやうなら……敵へ行くのかお前が？

ナンナ ええ……

ギドー もう歸つては來まい！

ナンナ いゝえ、歸つて來ます……

ギドー どうなるか、見て居らう……さうだ、見て居らう……お父さん、

第一幕

吝

やつぱり私わたしよりもよくブンナを知しつてゐるのはあなたでした！

よろめいて大理石の圓柱の一つにすがりつく。ブンナは其の方に眼をくれないで、靜にひそり出で行く。

第二幕

(プリンチワルレの幕營。目の醒めるやうな亂雜、絹と黄金の陣幕、武器や高貴な毛皮がそこらに取り散らしてある。大きな幾つかの櫃が半ば蓋を開いたまゝ置いてある。澤山の寶玉や燦爛たる品物が其の中から見えてゐる。幕營の入口は正面にある。そこにはごつしりした帷帳がかゝつてゐる。プリンチワルレがテーブルの傍に立つて書類や地圖や武器を整理してゐる。ヴェデオが入り來たる。)

ヴェデオ お手紙てがみが参まりました、國くにの辨務官べんむくわんから。

プリンチワルレ ツリワルチオから？

ヴェデオ はい、次席辨務官じせきべんむくわんのマラドーラ殿どのはまだ歸かへられません。

プリンチワルレ ヴェニスヴェニスの兵へいがカゼンチーネの山道さんだうから我が國くにを威嚇みくわくしてゐるが、ひよつと、するごあれは意外いざいの抵抗ていこうをするかも知れない。その手紙てがみをお見せみ(取つて讀む)あの男おとこ、私わたしに正式せいしきの命令めいれいをよこした、明日あすの未明みみに

第二幕

六二

總攻撃をかけるといふ、これが最後の命令で、聞かなければ直ちに捕縛するといふ……よろしい、少くとも今夜一夜は私のものだ……直ちに捕縛する……あ、彼等は何も知らない……そんな陳腐な平凡な言葉が何になる！ 今正に人生たつた一度の最高の潮時を待つてゐるものに、そんな嚇しが利くと思つてゐるのか……強迫、捕縛、誹謗、吟味、裁判——そんなものが何になる？……彼等は出来ることなら、勇氣さへあつたら疾くに私を捕縛してゐたのだ……

ウエディオ ツリヴルチオ殿は、そのお手紙と一緒に私に御傳言がありました。跡からすぐお出で下さうでございます、お目にかゝりたいと申されました……

プリンチワルレ あ、では彼れもいよく決心をしたね……會見したら色々

の事が決するだらう、それからあの萎びた小さい役人先生、こゝではフィレンチエの隠れた権力を、すべて代表してゐるが、でも嘗て正面から私と眼を見合せた事がない、憚れむべき白面の小男さん、私を死ぬよりも嫌がつてゐる。それが思ひがけなくもこゝへ來なければならぬ……何か重大な命令が來たに相違ない、それで怪物を其の洞穴に尋ねて對決しようといふのだらう……入口を堅めてゐるのは誰れか？

ウエディオ あなた様のガリシア隊の古參兵が二人で固めてをります、一人はヘルナンドーのやうに見えました、今一人はデイエゴでございませう。プリンチワルレ さうか、あれなら大丈夫だ、あの二人ならたとひ天の尊者を縛れと命じても反對しない……暗くなりかけて來た、ラムブをこもせ、何時だらう？

ウエディオ 九時をすぎました。

プリンチワルレ マルコー老人はまだ歸らないか？

ウエディオ 濠外の歩哨兵が到着次第連れて参ることになつてをります。

プリンチワルレ あの老人は、私の條件が容れられなかつたら、疾くに歸つて

来る筈だが……今に一切の事が定まる。私の一生もそれに引きつけられ

てゐる、譬へば囚人が眞暗な周囲を見つめてゐるこ、大きな船が帆に浪

を打たせて見はれて来る、さうした夢に彼等の一生を引きつけられて行

くのと同じ事だ……人間は斯うして、自分の運命も、智識も、靈魂も、

喜びも、悲みも、みんなあの果敢ない一婦人の愛に任せてしまふ！ 不

思議なものだ……笑つてそれに勝てるものなら、私は自分を笑ひでもする

……マルコーは歸つて来ない……では、あの女が来るだらう……行つて

烽火を見て来い、女が承知したといふ合圖の烽火を……明りがあるか見

て来い、その明りに、震へる足を導びかれてあの女が来るのだ、自分の

身を捨て、他人を生かす、人民を救ふと共に私を救ふ……いや、行くな

——私が行かう。私は少年の頃から今日の此の時を待つて居た、待ちあ

こがれてゐた、私の眼より先には、たとへ友人の眼でも、あれの来るの

を見迎へてはならない……(入口の所に行き帷帳をまくつて夜の景色を眺める) 御覽

明りが！ 眞つ暗な中に照り輝いて揺いでゐるぢやないか！……カムバ

ニーレの塔から——よし、さうなくちやならない……御覽、陰鬱な

闇の中を貫いてゐる！ ピザの町を照してゐる唯一つの光り……あ、

ピザの空に始めて咲いた莊嚴美麗な花といはうか、かすかな望で長く長

く待たれてゐたのだ！……あ、勇敢なピザの人々よ！ 今夜は祝宴を

開いて、おん身の歴史に長い記念を残すであらう、私も、自分の故郷を救つたよりも遙かに神聖な喜びを今宵味ひ知るだらう。

ヴェディオ (プリンチワルの腕にさほりながら) あちらへ参りませう、ツリウルチオ殿が向ふから見えます。

プリンチワルレ (退いて帷帳を下ろしながら) さうだ、我々はまだ………會見は簡単にしよう………(テーブルの方へ行き、そこにある書類をいちくる) あの男からの三通の手紙はごうした?

ヴェディオ そこには二通しかございません。

プリンチワルレ 差押へた二通と今夜の命令のこと……

ヴェディオ こゝにその二通がございます。今一通はあなた様が手で揉んでおいでになります……

プリンチワルレ やつて来たね……

(番兵が帷帳を掲げる、ツリウルチオ入り来たる)

ツリウルチオ 君はあの怪い明りを見ましたね、カムバニーレの塔からの合圖のやうですね?

プリンチワルレ 君はあれを合圖だと思ひますか?

ツリウルチオ 疑もなくさうですよ………ところで、私は君にお話がある。

プリンチワルレ 聞きませう、ヴェディオはあつちへ行つて居れ、でも、あまり遠くへ行かないでな、用があるかも知れないから。

(ヴェディオ出て行く。)

ツリウルチオ プリンチワルレ君、君にも分つてゐませうな、私が君に對して多大の尊敬を拂つてゐるといふことは、實際是れはもう一度ならず私が事實の上に證據立てた事だが、それでも、まだ其の他に澤山御存知ない

ここがある。なせといふに、フイレンチェの政策は、世間では権謀術數だといふが、それはたゞ用意周到なからで、大抵な事は秘密にして置いて本當に機密に與かるものでも知らない事が多い。我々はすべて國からの深遠な命令に従つてゐるのだから、お互に奮つてこの重大な秘密政策を助けなくちやなりません、フイレンチェの秘密はその最高知識の發現なのだからね、で斯う言つて置けば十分だと思ふが、私は君を選出するに就て随分骨を折りましたよ。君の若い時の事と系圖の明かでない事が邪魔をしたに拘らず、フイレンチェ共和國が嘗て繰り出した事のない程壯大な此度の出軍に、君を總司令官として推薦したので、それで、今までは何等その推薦を悔いるやうな事もなかつた。所が近來君に反對の一派が生じましてね。こんな事を君に漏らすのは、私が君に深厚な友情を持つ

てゐるため、義務をお留守にした事になりはしないかと思ひますがね、併し、あんまり偏狹に義務ばかり追うてゐると、往々にして思ひ切て寛大にするよりも却て害の多い事があります、だから、此際御承知を願ひたいといふのは君にも敵がありますよ、激烈に君を非難して、果斷に乏しい、ぐらついてゐる、なまけてゐる、と罵つてゐます。中には君の忠義心に對して、疑ひを挿むものさへある。巧に仕組んだ悪い風説が流布せられて其疑ひに色をつける。いろんな事が面白くない結果を來して議會の一部が君に不利益な眼を向けてゐます。それがどう〜君を捕縛して吟味するといふ議論にまでなつた。所が、都合よく私がいゝ時に相談を受けたものだから、急いでフイレンチェへ出かけて、譯もなく其の反證を擧げて來ました、私は君の味方ですよ。此の上はたゞ君が私の眞意を

認めて下さるか下さらないかにあるので、私に取つては、一時だつて二心を持つた事はない、君が働いて下さらないと我々は困るのだから、同僚のマラドローラ君はヴェニスの輜重隊のためにビビエナで喰ひとめられ
てゐるし、今一軍は北方からフィレンチェへ進んで來てゐる。フィレンチェも
危険な形勢に陥つてゐます。けれども君が明朝總攻撃をさへ開始して下
さればすべて好都合になるでせう、随分長く待つてゐた總攻撃だからね。
それで我が軍の最も精銳なのが手が明くし、同時に嘗て負けた事のない
唯一の大將が他へ廻されるといふものです。さうしてフィレンチェに凱旋
したら、盛んな歡呼と名譽の中に、昨日までの君の敵は、最も熱心な君
の身方になり、稱讃者になつて了ふ……

プリンチワルレ それだけですか、君の言はれる事は？

ツリウルチオ まづさうです。もつとも、御交際以來、實際君に對する友情は
日を追うて増しました、その事だけはわざと申し上げなかつたが、是れ
は随分困難な地位に立つてゐても、さうでしたよ。君と私とは法律上妙な
關係に立たされてゐましたからね。矛盾した様に見える法律で、大將の
權力が屢々——危急な場合だと——フィレンチェの秘密な力で牽制せられ
る、其の秘密力のお恥しい代表者が、今日のところ私だものだから……
プリンチワルレ 私がちやうど今落手した此の命令は、君がお書きでしたか？
ツリウルチオ さうです。

プリンチワルレ 君御自身で？

ツリウルチオ 疑ひもなく。なせそれをお尋ねです？

プリンチワルレ 此の二通の手紙は——御承知か？

ツリウルチオ かも知れません。分らないが、何が書いてあります？……先づ

中を見て……

プリンチワルレ それには及ばない、分つてゐます。

ツリウルチオ 二通とも君が差押へた手紙ですか、私の望み通りに？……試験

がうまく行つたね。

プリンチワルレ 君は、子供を相手にしてゐるのではないよ。まあ、こんな愚劣

な小細工の事などは論じないでしょう。でないと此の會見が徒らに長び

くから、早く切り上げたいものだ。到底フイレンチェの凱旋など、比べも

のにならない報酬が得られる、それが延びるのだ……此の手紙で、君は

私の一舉一動に對し、思ひ切つて卑劣な讒誣を逞うしてゐる、是れは單

に君の惡意からか、それともフイレンチェの狡猾極つた貪欲の爲めに、雇

大將たる私の勝利を値切らうと思つて、必要な準備をしたのか？……此
の手紙で見ると、實に恐しい程巧に一切の事が誣いてある。私自身でさ
へ自分の身を疑ふほどだ。私のすべての行動が不具な、卑劣な、汚れた
ものにされてゐる。それが此の包圍攻撃の始まる第一週から、すつと今
日にまで及んでゐるのだ。その今日、私は眼があいた——幸福な今日、
私は君の疑ひを事實にしようと思つた。君の手紙は注意して寫し取つ
てフイレンチェへ送つて、その返事も差押へた。君の言ふ事が用ゐられて
君の方が信用せられてゐる。非難の箇條が擧げてあればある程、たやす
く信用せられて、私は何等の審問も受けないで裁判せられ、死罪を宣告
せられてゐる……それで、もうたとひ天使の潔白を借りても君が提供し
た恐しい偽證を言ひ釋く力はないと諦めた……だから私はこゝで飛躍を

する、君の弱い鎖を切り放つて、機先を制してやる、百尺等頭に一步を轉ずるのだ。是れまで私は嘗て謀叛人になつた事はない。併し、此の二通の手紙が手に入つて以來、私は君を亡ぼす仕度に取りかゝつた。今夜、私は、愚劣な議政官や君等を賣つてやる、君等の上に、私の力の及ぶ限り残酷な痛手の打撃を喰はしてやる、そして私は、それを一生のうち最も高尚な仕事だと考へる、それによつて或る一都市を懲らしてやるのだ、陰謀を美德よりも尊んで、世界を詐欺と偽善と虚偽、忘恩、奸惡の力で支配しようとする、その都市を懲らしてやるのだ……今宵こそ、ビザの町が私に感謝する。ビザは君等の古い讐敵だ、腐敗を世界に廣げる君等をビザが防いでゐる、其の城壁の立つてゐる限り、永久に君等を防いでゐる。今夜こそビザの町は救はれて、頭をあげて今一度抵抗の息を吹きやうだ……

かへす……あゝ、これ立ち上らないで、無益な真似をしないで……すべての手段が盡してある。避けられるものぢやない。君はもう私の手の中にある。君ばかりぢやない、フィレンチェの運命まで私の手で掴んでゐるやうだ……

(ツリウルチオ短剣を抜きプリンチヴルレを覗つて急遽一撃を與へる。)

ツリウルチオ まだ……私の手が自由である限りは……
(プリンチヴルレ、腕で其の搏撃を外し、武器を高く上げさせる、其のはづみに自分の顔に觸れる、ツリウルチオの腰を捉へて)

プリンチヴルレ こんな騒ぎが突發しやうとは思はなかつたね……さあ、もう掴まへた。片手で押しつぶすことも出来る……此の短剣を下しさへすればいゝのだ……もう君の喉に向つてゐるやうだ。何うした、何も言はないね、恐しくないといふのか？

ツリウルチオ (冷かに) 恐しくない。其の短剣をつかへ、君の権利だ、私の命は無いものと思つてゐた。

プリンチヴルレ (手をゆるめて) あゝ……併し、さうすると、君のやつてる事は實に不思議だ……珍しいことだ、軍人でもそれほど平氣で死の手に向ふものは、たんどはない、その弱い體にその氣力があらうとは思はなかつた……

ツリウルチオ 君等のやうな武人は、動ともすると刀の切先より外に勇氣はな

いものと思ふ……
プリンチヴルレ さうかも知れない……よし……君は放つ譯には行かないが、害は加へないよ……君と私とは違つた神様に仕へてゐる。(顔の血を拭く) あゝ、血が出てゐる。切り込みやうは下手でもなかつたが……少し急

き込んだね、併し力はないでもない……も少しといふ所まで行つた……だが、どうだらう若し危く君を嫌な世界へ送らうとした奴があつて、それを君が掴まへたとしたら、何うする？

ツリウルチオ 容赦はしない。

プリンチヴルレ 君は私には分らないが……よほど變つた人だ……こんな手紙を書くのは卑劣だと言つて了へ、私は、フレンチエの爲めに血を注いで三度大戦争をしたが、少しも自分の身を痛はつた事はない、全力を盡した、そして得た所はみんな君等の爲だつた。私はフレンチエの忠實な僕であつた、嘗て不忠の心は微塵も私の胸に入り込まなかつた……君にはそれが分つてゐる筈だ、いつも私を偵察してゐたから……所が君の手紙を見ると、さもしい悪意か憎悪かは知らないが、私の一舉一動を曲解し

てゐる。私はフィレンチェの事しか思つてゐなかつたのに讒言に讒言を
ね虚偽に虚偽を重ねてゐる。

ツリウルチオ 事實は嘘でも——、そんな事は構はない、私は刻下の危急を
防がうとしたのだ、軍人が二度や三度の勝利に思ひ上つて、自分の君主
に服従しないやうになると、危険だ。君主の天職は軍人の天職よりも高
いからね。さういふ時が、果して今見るやうに前から豫期せられてゐた。
フィレンチェの人民は君を大事にしすぎたよ。で、そんな人民の崇拜する
偶像を破壊してやるのが私等の任務だ、一時は不興を買つても其の危険
な氣まぐれは抑へてやらなくちやならない。それで私は愈々破壊すべき
偶像を示してやる時期が来たと思つて、フィレンチェに警告を與へた。私の
偽りの意味はフィレンチェに分つてゐる筈だ……

プリンチワルレ 君の無慚な手紙さへなければ、其の時期は來なかつたのだ、
永久に來なかつたのだ……

ツリウルチオ 來たかも知れない、それだけで澤山だ……

プリンチワルレ 何！ 無罪の人が「かも知れない」だけで犠牲になるのか？
有るまじき危険呼ばりの下に、冷血漢が提供する犠牲になるのか？

ツリウルチオ フィレンチェの安寧のためには、一人の命ぐらゐ何でもない？

プリンチワルレ ちや、君はフィレンチェの運命を信じてゐるか、其の事業を、
其の存立を？ もしさうだと、フィレンチェは私には分らないものになる
……

ツリウルチオ 勿論、私はたゞフィレンチェだけを信ずる、其の他は私に取つて
何でもない……

プリンチワルレ つまりはさうだらう……君の言ふ事も正しい、さう信じてゐ

るのだから……私には國といふものがないから分らない。時々私も自分の國のない事を悔いる……しかし其の代りに君等の決して持てないものを持つてゐる、それだけは何人も私に及ばない……それで凡てを補ふ事が出来る……さあ行くが、別れやう、こんな謎を考へてゐる時間はない……私等はお互に遠く隔つた人間だ、それでゐて殆ど接觸する點もある——人はみんな自分の運命を持つてゐる……或は思想を追ふものもある、或は欲望を追ふものもある、君の思想を變へよと言はれてもむづかしい、私の欲望を變へよと言はれてもむづかしい……では、ツリウルチオ君、我々は別の道を行くのだ……握手して別れやう。

ツリウルチオ まだ……。私が君と握手するのは、刑罰の日だ……

プリンチワルレ それもよからう、今日は君が負けたが、明日は君が勝つかも知

れない……(ヴェディオを呼ぶ)ヴェディオ!

(ヴェディオ入り来る。)

ヴェディオ あなた様……何うなさいました、傷をお受けになつて、血が流れてゐます……

プリンチワルレ 何でもない……二人の番兵を呼べ、そして此の男を連れて行かせい。併し害を加へないやうにしてやれ……私の愛する敵だ……何所か安全な場所へ入れさせて、人に見られないやうにしてやれ、番兵どもが責任を持つて安全にしてやらなくてはいけない、そして私の命令が行つたら放免してやれ……

(ヴェディオ、ツリウルチオを導いて去る、プリンチワルレ鏡の前に立つて傷を驗する。)

プリンチワルレ 成程血が出る、脈管でも切つたやうだ。傷は深くあいが、ただ顔に傷をつけたね……人は見かけによらないものだ、あんな弱いよろ

よろした男が……(ヴェディオ歸つて来る。)言ひつけた通りにしたか!

ヴェディオ はい、是れが破滅の本になりは致しませんか!

プリンチワルレ 破滅!……あ、私は斯うしてなら死ぬる日まで日々破滅を

受けて行きたい!……破滅といふか、ヴェディオ!……でも、およそ此の

世界に、正當な復讐をして私ほどの幸福を得たものは又とあるまい――

夢みることを覚えて以來、ずっと夢みてゐた幸福を……私は待つてゐた、

祈つてゐた! それがためなら、如何なる罪も厭はなかつたらう、私の

ものとして、私に附屬して必ず來るべきものと極つてゐたのだから。其

の幸福が今、遂に私の運命の星に送られて、正義と憐みの力で、銀の光

をたよりに下つて來た。それをお前は破滅だといふ! あ、哀むべき

は血の冷たい人々だ!……哀むべきは戀のない人々だ!……お前等には分

るまいが、私の運命は今ちやうど、天の高潮に乗つてゐる、百の戀人、

千の喜び、それが私一人の分け前になる!……あ、私にはそれが分る!

……私はその刹那に觸れてゐる、乾坤一擲の大勝負を試みる人々が、忽

然として自分の地位を認められた時、彼等は人生の最高頂に立つてゐる、あ

らゆる物が彼等の下に集つて、其の命を聴き、其の手に形づくられる、

其の高潮の刹那に私が今觸れてゐる!……此の他の事は何うでもい、

又此の後に起る一切の事は何うでもい、……心霊恍惚の或る刹那はあ

んまり高大で、それを感ずる人間が押し潰されて了ふ……

ヴェディオ (麻の繃帯を持つてプリンチワルレに近寄り) 血がまだ流れて居ります、お顔

を巻きませう。

プリンチワルレ 然……それも已むを得なからう……併し御覽、お前の繃帯も

ナンヂ、ナンモ

私の眼を隠しはしない、(鏡を見込んで)あゝ、私は外科醫者の刀に僻易してゐる患者のやうだ、戀をするものが、やがて戀人を迎へようとして喜んでゐるのだとは見えない！ それからお前、ヴェディオ、かはいさうに、お前は何うなるだらう？

ヴェディオ あなた様のお出でなさる所へ私もついてまゐります……

プリンチワルレ いや、お前は私と別れなくちやならない……私も何所へ行くやら、何うなるやら、自分で分らぬ……お前はうまく逃げ了せ、誰れも追かけますまい、けれども若し主人と一緒だつたら……おゝその函に金貨がある、お前にやるから持つて行け、私にはもう要のないものだ……貨車はすつかり用意が出来たか、家畜も集めてあるか？

ヴェディオ 残らず天幕の前に居ります。

プリンチワルレ さうか。私が合圖をしたら、お前のすべき事だけして呉れ、

(遠くて發砲の音が一つ聞える) あれは何だ？

ヴェディオ 一發、前哨で射撃を致しました。

プリンチワルレ 誰れが命じたのだ……過失に違ひない……萬一あの女を射撃

したのぢやないか！ お前、さう言つたね……

ヴェディオ いや、そんな事はない筈でございます。幾人も番兵を出して置き

ましたから、あの方が見えませんでしたら、すぐこゝへ連れて参ります。

プリンチワルレ 行つて見て来い。

(ヴェディオが、出て行く。暫くの間プリンチワルレは一人である。ヴェディオ歸つて来て入口の帷帳を掲げ、つぶやくやうに「あなたさま」さういふ。彼れが引き下がるモモンナ・ワンナが長い外套に身を包んで現はれる。そして闕の所に立ち止まる。プリンチワルレは身を震はせながらワンナに近づく。)

ナンヂ、ナンモ

ナンブ、ナンモ

ワンナ (押しつけた壁で) 私は参りました、お差圖どほり……

プリンチワルレ あなたの手には血がついてゐる、傷を受けましたか？……

ワンナ 丸が肩のところをかすりしました……

プリンチワルレ 何うして？ 何時？……危い事でしたね——

ワンナ 營所の近くへ参りました時。

プリンチワルレ 誰れが撃ちましたか？……

ワンナ 存じません、其の男は逃げて了ひました。

プリンチワルレ 痛みますか……

ワンナ いゝえ。

プリンチワルレ 傷を巻かせませうか

ワンナ いゝえ、何ともございませぬ。

(しばらく沈黙)

プリンチワルレ 決心して來ましたか？……

ワンナ はい。

プリンチワルレ 事情を申し上げませうか？

ワンナ それには及びませぬ。

プリンチワルレ 少しも残念だと思ひませんか？……

ワンナ 残念だと思はないで來るやうに、約束でもなさいましたか？

プリンチワルレ ギドー君は承知しましたか？

ワンナ はい。

プリンチワルレ いやだと思ひなさるなら、さうおつしやい、まだ遅くはありませぬよ……

ナンブ、ナンモ

ワンナ いゝえ。

プリンチワルレ でも、どうしてあなたは斯んな事をなさる？

ワンナ それは、ピザの人民が餓えて死ぬるのですもの、その上、明日になつたら見すく一薙ぎに殺されて了ひます……

プリンチワルレ 他に理由はありませんか？

ワンナ 他にどんな譯がありませう？……

プリンチワルレ 私の信するところでは、貞節な女として……

ワンナ はい。

プリンチワルレ 夫を愛する女として……

ワンナ はい。

プリンチワルレ 深くですか？

ワンナ はい。

プリンチワルレ あなたは、上に外套を着てゐらつしやるだけですか？

ワンナ えい。

プリンチワルレ 天幕の前に澤山の車や家畜のゐたのを御覧なすつたか？

ワンナ えい。

プリンチワルレ あそこには、二百輛の貨車にトスカニアの小麥が一杯積んであります、あと二百輛の車には飼葉とシエンナの果實と葡萄酒が積んである、其他にまだドイツの火薬が三十臺と鉛が小さい車に十五臺ある、其のまはりにはアプリアの牛が六百頭と羊が千二百頭あります。それらみんなピザの町に這入らうとして、あなたの命令を待つてゐる。出發させてお目にかいませうか？

ワンナ えい。

プリンチワルレ では、此の天幕の戸口へいらつしやい。(帷帳を掲げ命令をし、合圖をする。漠然とした壮大な運動の起つた氣配の物音が聞える。無數の松明が點されてあちこちを動く。鞭の音、車の軋り、羊の鳴く聲、牛のうめく聲、ワンナとプリンチワルレは天幕の圓の所に立つて、暫らく見守つてゐる。巨大な輸送隊が星明りの夜に松明を振り照して出發する。) 今宵はじめて、あなたのお蔭でビザの町は餓死しなくなりませう。もう敗れる恐れはない。そして明日は何人も豫期しなかつた喜びと勝利の光榮に包まれるでせう……あなたは満足しましたか？

ワンナ えい。

プリンチワルレ では、この天幕を閉めませう。そうしてお握手をさせてください。宵の氣候は未だ穏かですが、更けると寒くなります。あなたは身の周りに武器を隠してはゐないでせうね、毒藥を持つてはゐないでせう

ね？

ワンナ 半靴と外套の外は何もありません。御心配なら探して御覽なさい

プリンチワルレ 心配するのは私のためじやありません、あなたのためです

ワンナ 私はビザの人民の命を、何よりも高くつもつてゐますから……

プリンチワルレ よろしい、あなたは立派な事をなすつた……さあ、こゝへおすはんなさい……荒くれ武士の長椅子です、硬くて粗末で、墓穴のやうに狭くて、あなたには不釣合です……こゝへ樂にゐらつしやい。此の虎の皮の上には、嘗て婦人のしなやかな體が觸れた事ありません……此の柔かな毛皮を足にお敷きなさい……山猫の皮です、凱旋の一夜或るア

フリカの帝王が私に呉れました……

(ワンナ、外套にしつかり身を包んですはる。)

プリンチワルレ ラムプの光りがあなたの眼に射してゐます、側へよせませう

か？

ワンナ 構ひません……

プリンチワルレ (長椅子の下に膝まづき、ワンナの手を取り) ジョ、ワンナ！……(ワンナ驚いて飛び立ち、じつとプリンチワルレを見る) お、ワンナさん、ワンナさん……

私も斯うしてあなたの名を呼んでゐた事があつたが……今その名を呼ぶと私は震へます……久しい間私の胸に三重に秘められてゐた、それが圍ひを破つて出て来たのです……其の名が私の心です、私の持つてゐる凡てのものです……其の名の一句々に私の命が這入つてゐる。それを口

に出すと私の命が流れ出るかと思ふ……私には親しい名前でした、知つてゐる名前だと思ひました。何度かそつと繰り返して、しまひには恐ろしいとも思はなくなつて、毎日毎時それを口にしてゐました。譬へば長い間的にもなく呼びかけてゐた、その女の面前で、たゞ一度でも言つて見たいと願ふ戀の言葉です、高大な愛の一言です……それを言ふためには、唇が自然に形をあらして、望み通りの時が来ると、柔かに、優しく、謙遜に、そして深い大きなあこがれの心でそれを言ふ。女もそれを聞いたものが、今日になつて見ると、影に過ぎない……同じものではなくなりました……恐れと悲みに傷はれて潰れて了つた。其の言葉が私の唇から出て自分でも殆ど分らない。その中に籠めて置いたすべての意味と崇

拜が、却つて私の力を壊さうとする、私の聲を枯らさうとする……

ナンナ 誰れです、あなたは？

プリンチワルレ 私が分りませんか？……思ひ出して下さらないか？……あゝ、あれほどの大事を、時が拭ひ消して了ふ！……けれども、あの大事を見たのは私一人に違ひない……恐らく忘れられるのがいゝでせう……もう望みもしますまい。悔いもしますまい！……あゝ、私はあなたに取つては物の數でもない……哀むべき男だ、一生の目的であつたものを、ほんの一瞬間しみるゝと眺めてゐる、不幸な男だ、何の頼みもかけない、何を頼まうかさへ知らない、けれども、言ふ事はある、出来るならあなたがお行きなさる前に、聞かせて置きたい、其の男に取つてあなたがこれまで何れほどの思ひであつたか、此後も一生何れほどの思ひをするか……

ナンナ では、あなたは私を御存じ？ 誰れでせう、あなたは？……

プリンチワルレ 斯うして、あなたを見てゐる私が、思ひ出せませんか？ 仙

郷に這入つたものが、生と喜びの源を見るやうに私はあなたを見てゐます……

ナンナ 思ひ出せません……第一、信じられません……

プリンチワルレ さうです、あなたはお忘れなすつた……あゝ、思つて居た通り、疾くの昔に忘れてお了ひなすつた！……初めて私がお目にかゝつたのはあなたが八つの時です、私は十二でした……

ナンナ 何所で？

プリンチワルレ ヴェニスで、六月の或日曜日に……私の父は年取つた飾屋でしたが、眞珠の頸輪をあなたのおつ母さんに持て行きました。おつ母さん

はそれを好ましげに見てお出なさる、私は庭を歩いてゐました、すると池の傍に、あなたがいらしやつた、ちやうど桃金嬢の茂つた中でした……細い金の指環が水に落ちたといつて……あなたは縁で泣いていらつしやつた……私は池に飛び込みました……指環は大理石の水盤の上に輝いてゐた、それを取つて、あなたの指に差して上げました……私はも少しで溺れようとした……けれども、あなたは私に接吻して下すつた、嬉しうでした……

ワンナ あれは金髪きんぱうの美しい、ジアネルロといふ子供こどもでし。たあなたがジ
アネルロでせうか？

プリンチワルレ さうです。

ワンナ あなたが何うしてさう見えませう？……其上そのうへお顔かほは繃帶はうたいで隠れて

ゐます……たいあなたの眼めが見えますばかり……

プリンチワルレ (繃帶はうたいを動かして) 傍わきへ寄せました、私わたしといふことがわかります

か？

ワンナ え、幾いくらか……さう思おもへます……あなたのお笑わらひなさるのが、
子供の時の面影おもかげを残のこしてゐます……まあ、あなたは手傷てきずを受けていらつ
しやる、血ちが流ながれてゐます……

プリンチワルレ あ、これ位くらゐ、なんでもありません……たいあなたに傷きずをつ

けては……

ワンナ 繃帶はうたいを直なして上げませう、曲まがつてゐます。(頬ほの回りに麻布あしふを巻まきつける)
私は今度の戦争せんそうでたび〜手負ておひを介抱かいほうしてやりました……さう〜、私わたし
おぼえてゐます……あのお庭にはをまた思おもひ出だしました、石榴ざくろの木きや薔薇ばらや

ナンブ・ナンモ

月桂樹が澤山ありましたつけ、私たちは、よくあそこで遊びましたね、お午すぎ、太陽が熱い砂の上に照つてゐる頃……

プリンチワルレ　みなで十二たび——私は數へてゐました……あの時した遊

び事や、あなたのおつしやつた言葉は今もで一々言ふことが出来ます……

ワンナ　それから、たしか或る日の事です、私はあなたを待つてゐました

——あなたを思つてゐたのです、そしてあなたは眞面目な物静かな性質

で、私を小さい女王のやうに大事にして下さつた……けれども、あなた

はそれつきり歸つて来て下さらなかつた……

プリンチワルレ　父は私をアフリカへ連れて行きました……その大砂漠で私

等親子は迷つて了つて……私はアラビヤ人の手に囚へられ、トルコ人の

手に囚へられ、スペイン人の手に囚へられた——それが私の生涯でした。

今一度私がヴェニスへ歸つた時は、あなたのおつ母さんは亡くらなれ、

あの庭は荒れ果てゝゐた……私は的もかくあなたを尋ねました……そし

てどうく聞き出しました。あなたの美しさのお蔭です、一度あなたを

見たものは誰れでも永く忘れないからです……

ワンナ　私が這入つて来たとき、あなたにすぐ分りましたか？

プリンチワルレ　たとひ一萬人の女が此の天幕に這入つて来て、あなたと同じ

顔をし同じ装ひをして、同じやうに美しくても私はあなたを見分けます、

一萬人の姉妹が親身に見分けられないほどよく似てゐても、私は立つて

あなたの手を取つて「是れが其の人だ」と言つて見せます……不思議です

不思議ぢやありませんか、愛する人の姿は、斯うして心の中に住み込む

力を持つてゐる。私の心にはあなたの姿が奥深く住んでゐて成長しまし

ナンブ・ナンモ

た、變化しました……昨日のよりも今日のは違つてゐました、花が咲いて来た、美しさが増して来た、年がたつに従つてあなたの姿に飾りがつきました、ちやうど蓄の様な少年が、年を取るに従つて天から恵みを受けるやうに……そんなでありながら、私がさつきあなたを見た時、初めは自分の眼に欺されてゐるかと思ひました……記憶の中であれ程忠實にあなたの姿を守り立てゝゐた、その私の記憶も、まだ臆病でした、手ぬるいものでした、とても、是れほどの光彩をあなたに加へる勇氣はありませんでした、あの、忽然として目の前に閃き出た輝しさを。たとへば、一度薄明りのさす花園で一輪の花を見て、そして目もあやな大日光の下に千萬輪の花を一時に見るやうな心地でした……あなたが這入つていらつしやると、私は再びその忘れ難い眉を見ました、髪を見ました、

眼を見ました、なつかしい顔に魂を見ました……けれども其の美しさだけは思ひも及ばない、日といふ日、月といふ月、幾年心に蓄へたあなたの美しさも——手ぬるい私の記憶で育つたものに過ぎなかつた、事實に比べては數にも比較にもならなかつた……

ワンナ さうね、あなたは、ちやうどあの年頃の戀をしていらつしやつた。けれど月日と遠い別れが、戀を一層美しいものにします……

プリンチワルレ 人はよく一生に一度の戀をしたといひますが、まことはさうでないのが多い……自分等の無情や欲望を掩ふために、彼等は一つの戀に生まれたもの、大悲哀を装はうとする、その中に真に自分の生活に喰ひ入つた、深い惱みの眞理を語らうとするものがあつても、幸福な戀人等が自在に使つた言葉は、みんな力を失ひ、重みを失つてゐる。それを

聞く女は、知らず／＼其の哀れな、神聖な、時として痛ましい言葉を凡俗のつまらない戯れと聞いて了ふ……

ナンナ 私はそんな事はしません。その戀の心は分かります、人間が命の始めからあこがれてゐる戀ですもの。それも年がたてば棄て、了ふ——私はまだ其の年にもならないけれど——年はすべてのものに終をつけて了ひます……まあそれはいいとして、さあ、聞かせて下さい、あなたが二度めにヴェニスをお通りなすつて私の行方をお聞きになつて——それからどうになりました？ それ程深く慕つていらつしやつた女に逢はうともなさらなかつたのですか？……

つしやる事を聞きました、其の貴族はピザで一番富んでゐて、一番勢力のある人だといふ事も聞きました、あなたが其の女王として敬愛せられ祝福せられてるといふ事も聞きました……、私は家もなく國もない一冒險者に過ぎなかつた——何を言ひ出す事がありましたらう？……運命は犠牲を求めてゐました、私はぐづ／＼しながら、愛の爲にそれを捧げました。あゝ、何度私はこの町の城壁の周りをさまよひあるいたでせう、幾たび門の鎖に取りすがつたでせう、あなたに逢ひたさの餘り、我を忘れてあなたの折角の戀と幸福を妨げてはならないと、それが恐さに取りすがりました、私は劍に倚つて立つた、二度三度と戦争に出た、雇はれの軍人として私の名は揚がりました……時の來るのを待ちながら、望みは無くなつてゐました。そしてどう／＼フイレンチェからピザへ派遣せられる

日が來ました……………

ワンナ 何うして、さう、男は戀をすると弱い臆病なものになるのでせう！

……………よく聞きわけて置いてください、私はあなたを戀してはゐません、是れまでだつて戀したことがあるか何うか分りません……………けれども私は男が私と同じやうに戀して呉れると言ひながら、其の前に勇氣を出すことの出來ないのを見ると、この胸で戀の誠の魂が躍ります、叫ぶやうです……………

プリンチワルレ 私は勇氣がなかつたのぢやありません……………行くには、あなたが考へていらつしやるよりも強い勇氣がいました……………併しもう遅かつたのです……………

ワンナ あなたがヴェニスをお立ちなすつた時は、まだ遅くはありません。一生を蔽ふほどの戀をするものに、遅いといふことはない筈です……………さうした戀は見すて、行くものぢやありません。來ないと知りながら望んでゐます。そして望みがなくなつてもまだもがいてゐます。私かあなたのおつしやる程の戀をしたら、私は屹度……………あゝ、何うしたかは、言へるものぢやない……………でも是れだけはたしかです、運命の力でもさうたやすく私の幸福をもぎ取ることはさせません……………運命に向つて「お退き、私がそこを通るのだ！」と言つてやります……………邪魔になる石は其のまゝ、私の都合のいゝ方へ轉がして見せます！

ごんなに高い價を拂つても、私の愛する男なら、其の男に私の愛を教へてやります、そして男自身の口からそれを言はせて見せます、一度なら

ナンブ.ナンモ

ず、二度でも三度でも言はせて見せます……

プリンチワルレ (女の手を取らうとしながら) あなたはあの男を愛してゐないでせ

う?

ワンナ 誰れを?

プリンチワルレ ギドーを。

ワンナ (手を引きこめながら)

私の手を取つちやいけません、此の手はあな

たに取らせられない。私といふものを明かにしなくちやなりません。ギ
ドーが私と結婚しました時は、私は一人ぼつちで、貧乏でした。一人で
貪しい女はすぐに世間の誹りに落ちて了ふ、中でも美しい女と、手管や
偽りを卑む女が取りわけさうなる……其の誹りをギドーは氣にかけない
で、私に眞實を盡くしました、その眞實が私は嬉しかつた。私は幸福で

ナンブ.ナンモ

した、人間の及ばない、ぼんやりした、恣まゝの夢から醒めたものが感ず
るやうな幸福を受けました。ですから私は、あなたにも聞いて頂きたい
氣がします、誰も知らないやうな幸福を探して月日を費さすとも、人の
世は楽しく過される。今日では、私はギドーを愛してゐます、あなたが
自身の上に想像していらつしやる愛よりも、もつと尋常な愛です、少く
とももつとごしつかりした、静な、信實な、たしかな愛です……それを運
命が私に授けて呉れた、私は眼を開いてそれを受取つた、他にはもう何
もいりません。若しそれを破すものがあつたら、私ぢやない……御覽な
さい、あなたは私を誤解なすつた……私があなたの誤りとして申さうと
したのは、あなたのことでも私たちのことでもありません、私はたゞ愛
の爲にいひました、第一の夜明から、心の上にさして来る微明りのやう

な愛の爲です、ありはあつても、私のものであなたのもでもない愛の爲です。あなたは斯ういふ愛の取るべき道も取つていらつしやらなかつたから……

プリンチワルレ プンナさん、あなたは私を過酷にお捌きなさる、私といふよりも、むしろ私の戀を過酷にお捌きなさる。此の一刹那に比べては、どんな他所の戀も絶望に過ぎない、其の幸福な刹那を齎らす爲めに私の戀が何をしてごんなに苦んだか、あなたは少しも知つていらつしやらない……けれども、よし、其の戀は何もせず、何も企てなくとも、有ることは疑へない、私が其の犠牲です、私の生命はそれに捉へられてゐる、胸に其の戀を持つた私は、人間の喜びと榮譽の凡ての源を失ひました！……あゝ、私を信じて下さい、信じて下さらなくちやならない、

私は何を求めるものでもありません、何を望むものでもありません！……あなたは今私に天幕の中にいらつしやる、私の心次第になる人だ……私に一言いへば、私の手を伸ばさへすれば、世間の戀する人が求めるすべてのものを得られます……それに拘らず、私が言つた戀は他のものを求める、それはあなたには分つてゐませう、だから私は、此の上私を疑つて下さらないやうに願ひます……あなたの手を取つたのも、私を信じて下さるだらうと思つたからです……私は二度と其の手にさばりませぬ、唇もつけませぬ、併し、プンナさん、こゝでお別れしたらもう逢ひませぬから、少くとも、私の戀が何んなものであつたか知つて置いて下さい、到底出来ない事だときまつた時、始めて其の前で踏み止まつた戀でした！

プリンチワルレ

本當の事を知つて置いて下さい。あなたをこゝへ來させて、

ビザをあなたの名で救ふために、私は何も犠牲にしてはゐません。

ワンナ

私分かりません……あなたは國にお叛きなすつたちやありません

か、これまでの功勞を棄て、お了ひなすつたちやありませんか、未來を

亡ぼしてお了ひなすつたちやありませんか？ あなたの前に見えてゐる

のは何でせう？ 追放でせうか？ 死罪でせうか？

プリンチワルレ

第一、私は國といふものを持つてゐません。若し國があつた

ら、私の戀は如何に大くとも、其爲に國に叛きはしなかつたでせう……

所が、私は、一雇はれの軍人たるに過ぎません、向ふが信義を守れば私

も守るし、向ふが裏切すれば私も謀叛人になる……私はフレンチェの辨

務官等が爲めに冤罪を蒙つて、あの商人どもの共和政府から調べも受け

ずに罰せられました、私はもう亡びたのだと覺悟しました、で、今夜の
此の事は、私の破滅を早めるよりも、却つて出来ることなら私を救ふ道
になるかも知れません……

ワンナ

私の爲に犠牲にして下すつたのは、そんなに僅かの事でせうか？

プリンチワルレ

全く何もありません……さう言ふ外はないのです。偽りで買

つたあなたの笑みは、私に何の喜びにもならない……

ワンナ

あゝ、あなた、あなた、それが愛よりもすつと貴いのです、何ん

な愛の證據よりもすつと嬉しいのです！……此の上もう、あなたは、私

の手を當てもなくお求めなさるに及ばない、さあ、此の手を……

プリンチワルレ

私はむしろ愛で此の手が取りたい！……が、そんな事は何う

でもいゝ！……もう、私のものです、ワンナさん、斯うして私の両手の間

に擱んでゐます、私は其の香に酔つてゐます、其の命に生きてゐます、私と一體になつてゐます……暫くこの美しい幻に恍惚としてゐます……あゝ、此のなつかしい手！ 私が開きも閉ぢもする、秘かな不思議な愛の言葉で、此の手が私の間に答へる。私は此の手に接吻する、あなたはそれを其のまゝにしてゐらつしやる……では、あなたを此の苦しい地位におとした私の罪を許して下さいさるか？……

ナンナ 私だつて、あなたの地位にゐたら、同じ事をしたでせう、結果はごうであらうと……

プリンチワルレ あなたは、此の天幕へ来るのを承知なすつた時、私が誰れだか御存じでしたか？……

ナンナ 誰も知つてゐませんでした。變な噂があつて……プリンチワルレ
は物凄い老人だといふものもあるし、非常に美しい若い王子だといふものもありました……

プリンチワルレ 併し、ギドー君の父上は私と會ひましたが、何も言ひませんでしたか？……

ナンナ いゝえ。

プリンチワルレ 問ひもなさらなかつたか？……

ナンナ ええ。

プリンチワルレ そして、あなたは氣も遠くならなかつたのですか、夜一人でこんな見ず知らずの野蠻人の營所へ来て？……

ナンナ 犠牲は覺悟してゐました……

プリンチワルレ それから、私を見ても？

ナンブ、ナンモ

ワンナ 最初は繻帯でお顔が見えませんでした……

プリンチワルレ え、けれどもズンナさん、後に繻帯を上げた時に？

ワンナ 其の時には變りました、私はもうあなたが分つてゐました……それで、あなたは、私がこの天幕に這入つて来るのを御覽なすつて——どんな事を其の時思つてゐらしやつて？ 何をしようかと考へてゐらしやつて？……

プリンチワルレ あ、何と言ひませう！……私はもうだめだと覺悟してゐました、一切を私と一緒に引き倒してやらうといふ、狂妄な願を持つてゐました……そして此の私の戀のために、あなたを憎いと思つてゐました！ 今考へると、自分で不思議なやうです……あなたの言葉でない言葉が、あなたの舉動でない舉動が、たゞ一つあれば、私の體内の野獸性は切り

放たれて、私の憎みは扇ぎ立てられたでせう……けれども、一目あなたを見て、それが出来ない事だと分りました……

ワンナ 私にもそれが分りました、そして恐れがすつかり無くなりました、私たちは一言も言はない内に、お互に解し合つたのです……不思議ぢやありませんか……私があなたのやうな戀をしたら、屹度あなたと同じ事をしたでせう……じつとしてあなたの言葉を聞いてゐる刹那には、私が話してゐるやうな氣がする、あなたの言葉が私の言葉になつて、私の話すのをあなたが聞いてゐらしやるやうな氣がする……

プリンチワルレ 私もです、ズンナさん、私は一時に自分等と他のすべてのものを隔てる壁が透明になつたやうに感じました。さながら兩手を、滾滾として流れる水に突き入れて、そして引き上げると光明に燦いてゐる、

ナンブ、ナンモ

頼みと誠に照りはえてゐる……人間といふものが一變したかと思はれま
した、是れまで考へてゐた事は間違ひだと思はれました……何よりも、
私は私自身が一變したと感じました、とうとう、永い囚れから脱出しまし
た。門は開きかゝつてゐる、無数の花と青葉が横木に絡んでゐる、雪は
遙かの地平線に解けて行く、朝の爽かな空氣が私の魂に這入つて、私の
戀に息をします……

ナンナ 私も變りました。私は、お目にかゝつた最初からあんなに口を開
いた自分が不思議でならない……私は不斷黙つてゐます……これまで、
父のマルコーの他はついで誰れともこれほど話した事はありません。父
と話すのさへこんなではありません……あの人は、いつも數限りない夢
に包まれてゐてめつたに私とも口をきかない……其の他の人々はみんな

眼の中に何か一つの物があつて、私の心を凍らせて了ふ。何うしてその
人々を愛すると言へませう、その人々の心を知りたい氣が起りませう？
……あなたの眼は私を押し附けない、私を嚇さない……一目見て私はあ
なたを見知りしました、前に何所で逢つたかは分らなかつたけれど……
プリンチワルレ、ナンナさん、あなたは、若し不運の星が私をこんなに遅くあ
なたに引き合せなかつたら、私を愛して下すつたでせうか？……

ナンナ 其の時愛したでせうと言ふのも、今愛しますといふのも同じ事に
なりません、ねえあなた、私にそれは出来ない事でせう？……でも、私
たちは斯うして離れ小島に取り残された心で語り合つてゐます……私が
世界に一人ぼつちだつたら、此の上何も言ふ事は無いでせう……けれど
斯うして二人で過去の想ひに笑みを交はしてゐれば、人の苦みも忘れて

ゐますが……私がピザを出た時のギドーの嘆きを思ふと、あの絶望の眼
 と衰へた顔と——お、もう、待つてゐられない！……夜明に間もないで
 せう、早く知りたいたい！……足音が聞えます、誰れか天幕の傍を通つてゐ
 ます……人民が帷帳の後で私語いてゐる……お聞きなさい、お聞きなさ
 い！……何でせう？

(私語の聲と急な足音が天幕のそとに聞える。するさ外からヴェテイオの聲がする。)

ヴェテイオ (あちらで) あなた様！

プリンチワルレ ヴエテイオだ、這入れ！ それで？

ヴェテイオ (天幕の入口で) 早くなさいませ、早くなさいませ、お逃げなさらな
 くてはいけません！ 一瞬間の猶豫もなりません！ フィレンチェの次席
 辨務官マラドーラ殿が……

プリンチワルレ あの男はビビエナにゐたが……

ヴェテイオ 歸つて参りました……六百のフィレンチェ兵を引きつれて居ります
 ……通るところを見ました、陣營は大混雑を來たして居ります……マラ
 ドーラ殿が命令を持つて來られたのでございます……あなた様を叛逆人
 だと宣言いたしました……今、ツリグルチオを探して居ります、ですか
 ら、若しあなた様がこゝにおゐるので内に探し出しますと……

プリンチワルレ さあ、ヴァンナさん。

ヴァンナ 何所へ行くのですか？

プリンチワルレ ヴエテイオに信用の出来る兵を二人つけて、ピザまで送らせま
 す……

ヴァンナ そして、あなたは、どうなさるの？

プリンチワルレ 分りませんが、そんな事は構はない、世界は広いから——隠れ家を見つけてませう。

ヴェディオ お、あかた様、氣をおつけ下さい！ 市街の周囲の田舎はもう

すつかり圍まれました。トスカニアは間諜で一杯でございます……

ワンナ ビザへいらつしやい。

プリンチワルレ あなたと？……

ワンナ ええ。

プリンチワルレ いけない……

ワンナ ほんの幾日か……行衛を暗ますために……

プリンチワルレ ギドー君が何うするでせう？

ワンナ ギドーだつて、賓客に對する禮は守るでせう……

プリンチワルレ あなたがお話しなすつたら、それを信じて呉れるでせうか？

……

ワンナ 信じます……若し私を信じて呉れなかつたら……けれども信ずる

でせう、信じなくちやなりません。さあ……

プリンチワルレ い、や。

ワンナ なせ？——何を恐れてゐらつしやる？

プリンチワルレ あなたの爲めに恐れます……

ワンナ 私のために？ 私にとつては危険は同じ事です、一人で歸らうと

あなたを連れて歸らうと。恐れなくちやならないのは、あなたの爲めで

す、ビザをお救ひなすつたあなたの爲めです。斯うなれば、ビザがあな

たを救ふのは當然ぢやありませんか……私の保護の下にいらつしやい、

私^{わたし}があなたを引^ひき受^うけます……

プリンチワルレ さうして下^{くだ}さい、一^{いっしょ}緒^ゆに行^ゆきませう……

ウンナ 是^{これ}に越^こした愛^{あい}の證^{しょうこ}據^こはありませぬ……さあ、後^{おく}れないやうに……

天幕^{てんまく}を明^あけ放^{はな}しませう。

(プリンチワルレ入口の方へ行つて、帷帳を一杯に開く。ウンナつゞく。人聲と武器の打ち合ふ音が廣漠なつぶやきのやうに聞える中に際立つて聞えるのは遠くの鐘の音である。それが鋭く夜の沈靜を破つて喜ばしげに鳴り響く。遙か向ふの地平線にピザが燦爛たる燈火を連れて見える。祝賀の大篝火が幾つも暗い空に巨大な火影を投げてゐる。)

プリンチワルレ 御覽^{ごらん}なさい、ウンナさん、御覽^{ごらん}なさい！

ウンナ 何^{なん}です、あなた？……あゝ、分^{わか}りました！……みんなピザの人^{ひと}たち

ちが焚^たく喜^{よろこ}びの火^ひです、あなたが爲^なすつた事^{こと}を輝^{かがや}かさうと思^{おも}つて……城^{じやう}

壁^{へき}が光^{ひか}つてゐます、砦^{とりで}が輝^{かがや}いてゐます、カムバニールの塔^{とう}が喜^{よろこ}びの松^{たいまつ}明^{あかり}

のやうに闇^{やみ}を照^てしてゐます、御覽^{ごらん}なさい、あの照^てり輝^{かがや}いてゐる澤^{たく}山^{さん}の塔^{とう}が星^{ほし}とさゝやいて！……町^{まち}までが空^{そら}に反^{はん}射^{しゃ}してゐます。宵^{よひ}に踏^ふんで來^きた道^{みち}がはつきり見^みえるやうです！……あそこの廣^{ひろ}場^ばには火^ひの塔^{とう}がある、カムポサントーの墓^{はち}地^ちは、影^{かげ}の島^{しま}になつてゐる……思^{おも}つても御覽^{ごらん}なさい、ピザの命^{いのち}が、ちやうど今^{いま}最^{さい}後^ごの息^{いき}を引^ひきかけて、だしぬけによみ還^{かへ}つたのです、それが塔^{とう}から塔^{とう}へ飛^とび移^{うつ}り、四^{はう}方^{ほう}の空^{そら}を駆^かけ廻^{まわ}つて、城^{じやう}壁^{へき}に溢^{あふ}れ國中^{くにぢゆう}に溢^{あふ}れて來^きます。そして私^{わたし}たちに歸^{かへ}れといふ合^{あひ}圖^づをしてゐます……お聞^ききあさい、お聞^ききなさい！……あの叫^{さけ}び聲^{こゑ}を、あの嬉^{うれ}しさうな聲^{こゑ}を、あの騒^{さわ}ぎを、大^{おほ}波^{なみ}がピザの町^{まち}に押^おし寄^よせたやうです！……鐘^{かね}の音^ねが聞^きえます、私^{わたし}の婚^{こん}禮^{らい}の夜^よに聞^きいたやうな鐘^{かね}の音^ねが……あゝ、私^{わたし}は幸^{こう}福^{ふく}です、幸^{こう}福^{ふく}です、世^よの中^{なか}で一^{いち}番^{ばん}幸^{こう}福^{ふく}なものは私^{わたし}です、それもあなたのお蔭^{かげ}です、

本當に私を愛して下さる、あなたのお蔭です！……さあ、あなた、あなた！（頬に接吻する）それが、私の、あなたに上げられるたつた一つの接吻です……

プリンチワルレ お、あなた、ヴンナさん、戀に、是れより美しい接吻が望まれませうか！……でも御覽なさい、あなたは震へてゐらつしやる、膝を縮めてゐらつしやる！……さあ、私にお縋りなさい、腕を私におかけなさい……

ヴンナ 何でもありません、息切れがしたのです——無理な力を出したからです。手を貸して下さい、連れて行つて下さい！私の幸福な、第一の歩みを妨げないやうに……あ、何といふ美さでせう、今宵の曉の覺めぎはは！……さ、早く！急ぎませう、時刻が來ます。ピザに喜びの色

の消えない前に……

（二人一緒に出て行く、プリンチワルレはヴンナを支へて）

第三幕

ナンブ、ナンモ

(ギドー・コロソナの大廣間、高い幾つかの窓、廊、大理石の圓柱等、左手、背面に露臺がある。外からそれに上るには大きな二重の階段がある。露臺の欄干の上に花を一杯にさした大きな瓶が幾つか載つてゐる。室の中央、圓柱の間に廣やかな大理石の段があつて露臺に通ずる。露臺からは市街の大部分を一目に見下すことが出来る。マルコー、ギドー、ホルソー、トレルロー入り来る。)

ギドー 私(わたし)はあなたにも、ヴンナにも、あらゆる人(ひと)に一步(いっぽ)を譲(ゆづ)つてゐました。併(しか)し今度(こんど)こそ私(わたし)の番(ばん)になるのが至當(したう)です。私(わたし)は黙(もく)してゐた、息(いき)を殺(ころ)して隠(かく)れてゐた——臆病者(おくべうもの)が自分(おのれ)の家(うち)を賊(ぞく)に荒(あ)らさせながら隠(かく)れてゐたやうなものです……でも、私(わたし)の屈辱(くつじやく)で、名譽(めいよ)は全(ぜん)うして來(き)ました……あなた(あなた)は私(わたし)を商人(しょうじん)になすつた、小商人(こしょうじん)になすつた、惡賢(わるがしこ)い取引人(とりひきじん)になすつ

た……が、もう夜明(よあけ)が來(き)ました……私(わたし)は自分(おのれ)の立場(たちば)を動(うご)かなかつた…………約束(やくそく)が出來(でき)て、私(わたし)はそれを承認(せいん)する外(ほか)はなかつた、あなた(あなた)の方(がた)方の食物(しょくぶつ)を私(わたし)は買(か)はざるを得(え)なかつた……今夜(こんや)の此(こ)の貴(たか)い夜(よる)は買(か)ひ手(て)の言(い)ふまゝ、でした……あゝ、この小麥(こむぎ)や、羊(ひつじ)や、牛(うし)のためにあれ程(ほど)の代價(だいか)を拂(はら)つて、誰(だ)れが高(たか)くなかつたといふ……それで、あなた(あなた)の方(がた)方は腹(はら)一杯(いっぱい)に食(く)つてお了(しよ)ひなすつた、私(わたし)はその價(あたい)を拂(はら)つた……これで私(わたし)は自由(じゆう)になつた、今度(こんど)主人(しゆじん)になつた、私(わたし)の恥辱(ちじやく)を投(な)げ棄(す)てる！……

マルコー ギドーや、お前(まへ)の爲(ため)ようといふのが何(なに)んな事(こと)だか私(わたし)には分(わか)らない、それから誰(だ)れも斯(か)ういふ悲(かな)しみに立(た)ち入(い)る權利(けんり)はありませぬ……言葉(ことば)では慰(なぐさ)められない、其(そ)の本(もと)になつたお前(まへ)の周圍(しうゐ)の幸福(かうふく)が却(かへ)つてそれを烈(はげ)しく鋭(す)くするといふ事(こと)も知(し)つてゐる……ピザ(ピザ)は救(すく)はれた。併(しか)し、其(そ)の救(すく)ひが

ナンブ、ナンモ

お前には随分高いものになつてゐるのを氣の毒だと思ひます。だから、それだけの負擔を我慢させられたお前に對しては、私ごもが頭を下げます……が、やつぱり昨日の事を思へば、私はあの通りにする外はない、同じ犠牲を選び出して、同じ不正を勧める。人といふものは、正義をしようとするれば……哀いかな、生涯に幾つかの様々な不正の間を辿らなくてはならない……何と言つてよいやら、たゞ一度は親んでゐた私のこの聲が、せめて是れ限りお前の胸に通ずるなら、お願ひだから、ギドーや、怒りと悲みの第一の言葉に盲従しないやうに……少くとも、危険な時刻を通り越して、取り返しのつかない言葉を口にする恐れなくなるまで待つて呉れ……ヴンナは間もなく歸るだらうが、今日あれを所置することば止めて呉れ、取り返しのつかない事をして呉れるな……すべて過度

の悲みに支配せられて言つたり爲たりする事は、自然と残忍なまでに取り返しのつかないものだ……ヴンナは喜んで、同時に絶望して歸るだらう……叱つてはいけない。日數がたつてから話すのと同じ心持で話すだけの忍耐が無ささうだつたら、あれに逢ふ事を延ばして呉れ……己みがたい自然の力に弄ばれて居る哀れな我々に取つてはな、過ぎ行く年月の中に、十分な善も正義も智慧も籠つてゐる。不幸に眼の曇つたとき我々が求めなくてはならない貴い言葉は、たゞ十分に理解し容赦して愛の還つて來た時に發する言葉のみだ……

ギドー すみましたか？　そこで今はもう文句に甘味をつけてゐる時ではありません、今日そんなことに欺されるものは一人もゐない……あなたに是れ限りと思つて、言ふべき事を言はせたのは、あなたの智慧が何を代

りにして、私の見事に壊れた一生を償はうとなさるか、知りたかつたからです……御覧なさい、私が貰ふものは何です！ 待つてをれ、忍耐しろ、受けてやれ、忘れてやれ、許せ、泣け！ ……ふむ、いけません！ それでは満足されない！……私はむしろ聰明でありたくない、恥辱が遁れたい！ それは言葉では出来ません……私のつもりは、極めて簡単です——私のやらうとする事は、つい四五年前ならあなたが私にお勧めなすつたに違ひない。ヴンナを私から奪つた男がある。ヴンナはもう私のものでないと共に、其の男は其のまゝである。さう思つて下さい。私は動詞や形容詞の規則と違つた規則に導かれてゐる人間です。私の従つて行く大法則は、生きてゐるものが誰れでも頭を下げざるを得ない法則です……ビザは今や食物を得ました。武器を得ました。食ふことが出来る、

戦ふことが出来る、さうです、私は私の得べきものを求めます。今日から以後、ビザの兵卒は私のもので、少くとも、其の最上の部分は——私が自身で見抜いて、自身で金を出して扶助してやつたものです。私のビザに對する義務は果しました——こんどは私が自分のものを要求します。私の番として、要求する権利を持つてゐます、それが果されない中は、此等の兵卒は返しません……其の他は、ヴンナは——許してやりませ、或はプリンチブルを亡ぼした後に許してやりませ……ヴンナは欺されたのです。惑はされたのです。けれども少くともあれが爲た事には義に勇む心がある……あれの慈悲心や寛かな魂が最も悪く利用せられたのだ……それもいゝ……ヴンナの此の所業を忘れることは不可能だらうが、少くとも、遙かの過去に薄れて了つて、愛もそれを尋ねられない

やうにはなるだらう……たゞあちらに一人、私が見るさへ恥と戦慄を禁
じない奴が残つてゐる……又こゝに一人、偉大な高尚な幸福の案内者で
あり維持者であるのを一生の天職としてゐながら、其の敵となり禍とな
つた人がゐる、そのため今に皆の前に恐ろしい事が起るだらう、恐ろしいけ
れども正しい事だ……一時世の中が転倒して子が父を捉へて裁判をする、
斥ける、呪ふ、卑み、憎んで押しつける……

マルコー 私は呪つて呉れ、併しブンナは許して呉れ……萬一あれほどの人
命を救つたブンナの義勇な行に許しがたい過があつたとすれば、それは
私のせいだが、義勇はブンナの功だ……私の助言するのは私にとつて容
易な事だつた。少しも犠牲には與らないのだからな。で今日は其の爲め
私が此の世で大事にしてゐたものをみんな剝ぎ取られたが、それでも、

私は尙一層よい助言だつたと思ひます……私はお前の捌きを争ふ権利は持
つてゐない、私が若かつたら、お前と同じ事をしたらう……ギドーや、
私は行きますよ、もう二度と私の顔を見せまい、お前が私を見るのを嫌
つてゐることも、よく知つてゐます、私がまたお前を見に来る事はあつ
ても、お前には氣のつかないやうにする……で、斯うして出て行く以上、
私は、とてもお前をさういふ地位に陥れた罪の赦されるまで生てゐる望
はない——私の過去に照して見ても、赦すといふ事は、人生の盛りに立つ
てゐる間は急に出来ないものだから——斯うして出た出上、せめてお前
の憎みと憤りと胸を剝るやうな記憶とをみんな私が持ち去つたと信じさ
せて呉れ、そして、今こゝへ来るブンナに對しては、何も残つてゐない
と思はせて呉れ……此の外には、たゞ一つの願がある……是れを最後に

ブンナがお前の腕に寄りかゝるのを見せて呉れ……それで私は何にも言はず、何の不平もなく行きませう……人間の愁ひといふものは、一番年を取つたものが、一番多く荷つて行くがいゝ、其の重荷のすべり落ちる前に、もう幾足も残つてゐないのだから……

(マルコーの終りの言葉の切れぬうち、もう漠然たる底強い泣きが外部から聞える。次の沈黙のあひだ、此の騒音が段々近づくと共に段々はつきりとして増して来る。最初に何かを待ち設けるやうな動搖があつて、それから更に遠く群衆のあちこちを駆け廻りながら叫ぶ聲がする。間もなく漠然たる叫聲が形を成して、諸方から段々明瞭に、何百度もなく繰り返へされる「アンナ、ブンナ、ビザのモンナ・ブンナ。モンナ・ブンナ萬歳。ブンナ、アンナ、ブンナ」さいふ聲。)

マルコー(露臺へ通する廊に馳せ出で)ブンナだ!……歸つて来た!……あそこにある!……群衆が喝采してゐる、喝采してゐる! 聞いて御覽、聞いて御覽!

(ホルソーとトレルロー、其後を追ふて露臺へ行く。ギドーは一人残つて、柱によりかゝり、じつと前を見たまゝである。此の間始終外部からの人聲が高く高くなつて、急速に近づいて来る。)

マルコー(露臺の上で)あゝ、御覽! あの廣場を、あの町を、あの窓もあの木もみんな群衆がふつてゐる手や腕で眞つ黒に見える! 屋根も、瓦も、木の葉もみんな人間に變つたやうだ……でも、ブンナは何所にゐる? ……見えるのは、たゞ雲のやうなものが閉ぢたり開いたりしてゐるばかりだ、ホルソーや、哀れな此の眼がな、私を惑はせて、私の愛に裏切りをする……老年と涙で見えなくする……あんなに待ちうけてゐた一人の人を見ることが出来ない……あれは何處にゐるか、あれは何處にゐるか? 何う行けばあれに逢へるか? ……

ホルソー(マルコーを引きよめながら)いや下へお出でなさいますな、人民どもが

熱狂して居ります。全く統御を失つて居ります、興奮して逆上して居ります、婦人は卒倒いたしますし、小供は踏み倒されて了ひます！……第一、無益でございます、こちらへお出でになりますから、あそこへ見えませんでした！……御覧なさい頭をお上げになりました！……私たちを御覧になりました……急いでこちらへお出でになります！ あゝ、見上げてお笑ひになりました！……

マルコー お前さんには見えても、私には見えない！……此の死にかゝつた私の眼には何も見分けられない！……今はじめて、私は老年といふものを呪ふよ、是れまでお蔭で随分色々の事を學んだが、今となつて、此の一つのものを私に見せない！……併しお前には見えるのだから、何んな様子だか知らせて呉れ？……あれの顔が見えるかい？

ホルソー 意氣揚々として歸つていらつしやいます……人民の上には照り輝いてゐるやうでございます……

トレルロー だが、お傍に一緒にあるてる男は誰れだらう？

ホルソー 分らないね……ついぞ見た事がない、顔を隠してゐる……

マルコー それ、みんなが大聲を揚げてゐるではないか……御殿中が震へるやうだ、瓶にさした花が、階段の上に落ちかゝる……敷石までが脚下から高まつて来て、此の大歡喜の中に私等を掃き去らうとしてゐる……あゝ私にも見えて来た……みんな門の近くへ押しよせてゐる！ 群衆が二つに分れた……

ホルソー はい、ヴンナ様の前にでございます、あの方の爲めに道を明けて居ります、勝利の道でございます、愛の道でございます……道に花を投

げて居ります、それから棕櫚の葉も、寶玉も……母親達は、子供を差し出してあの方にさはつて貰つて居ります。男どもは、お踏みになつた石に接吻しようとして屈んでゐます……お氣をつけなさいませ……群衆が近よりすぎました……みんな嬉さで氣狂にあつて居ります……あれ等が此の階段まで來ましたら、私どもは、けし飛ばされて了ひませう……あ、よかつた番兵が一方から突進してまゐりました、入口を固めるのでございます……間に合ふなら人民をしめ出して、門を閉ぢるやうに命令いたしませう……

マルコー いや、いや！ こゝにも歡びの花を咲き盛らすがい、人民の胸に咲き誇つてゐるやうに！ あれ等の廣大な愛が物を言つてゐるのだ——思ふ存分にさせるがい！ あれ等も随分苦んだ！……救ひの來た今

日、關門を設けてあれ等をせきとめてはならない！ あゝ、氣の毒な勇敢な人民たちよ、私も喜びに酔うてゐる、私も君方と一緒に聲を揚げますぞ！……あゝ、ブンナ、お前、ブンナ！ お前か、階段の上に見えるのは？……(駆け出してブンナに出逢はうとするのを、ホルソーとトレローが引きとめる)

お出で！ ブンナお出で！ 皆で私を引きとめてゐる！ 皆此の壯大な喜びに驚かされたのだ！ さあ、ブンナ、さあ！ 昔のジュディスよりも美しい、リユークリスよりも潔い！……お出で！……こゝへ、花の咲いてゐる中へ！(大理石の瓶の所へ走りより、花を掴んで階段の麓に投げる) 私も花を持つてゐるよ、人生を祝福するために！ 私も百合と月桂樹と薔薇の花を以て榮光の冠を飾りますよ！

(喧噪の聲が段々激しくなる。ブンナはプリンチザルレと一緒に階段の頂きに現はれ、マ

ナンブ.ナンモ

ルコーの両腕に身を投げかける。群衆が階段、廊、露臺に侵入する、併しヅンナ、プリ
ンチアルレ、マルコー、ホルソー、トレルロー等の一團からちよつと離れた所に留まつて
ゐる。

ナンナ お父さま、私は幸福です……

マコルー (ヅンナをしっかりと抱きながら) 私もだよ、ヅンナや、今一度お前を見る
ことが出来てな！……此の涙の中からお前を見て置かう……天もお前の
歸るのを歡呼してゐる、其の天のあなたから降りて来たよりも、もつと
お前の身は光つてゐる！……如何に恐しい敵も、お前の眼から其の光明
を奪ふことは出来なかつた、お前の唇からたゞ一つの笑みを奪ふことも
出来なかつた！……

ナンナ お父さま、聞いて下さい……けれど、ギドーはどこに居ませう？
………一番に聞いて貰ふのはあの人でなくては——聞いて安心して貰

ふのは。

マルコー ズンナや、お前、ギドーはそこにゐるよ……お出で、……あれが
私を遠ざけたのは、もつともな事であらうが、お前は赦される、お前の
光榮ある罪は赦される。どうか私は、お前がギドーの腕に抱き取られる
のを見たいと思ふ、それがお前の愛を目撃する最後にならうから……

(ギドー、ヅンナの方へ進みよる。ヅンナは何か言はうとし——ギドーの腕に身を投げか
けやうとする——併しギドーはそつけない舉動で、ヅンナを止めて、突き放す。そして周
圍を取り巻いてゐる人々に向つて。)

ギドー (鋭い命令的な聲で) 行け、みんな！……

ナンナ いえ、いえ、待たせて置いて下さい！……あなた、私はあなたにも
言ふし、あの人だちに言はなくちやなりません……あなた、よく聞いて
下さい！

ナンブ.ナンモ

ギドー（アンナを止め、後の方へ押しやって、段々怒りの増した聲を張り上げ）私の近くへ来るな、私の體にさはるな！（群衆の方へ進みよる、群衆は室の中まで侵入して來たが、ギドーを見て後へ下がる）私の言葉が聞えないか？ 行けと言ふに！ 出て貰はう！ 貴様等の家では貴様等が主人だらうが、こゝは私の支配だ！ ボルソー、トレルロー、番兵を呼べ！ あゝ、分かつたよ！ 貴様等は食物を得たから、此のおもしろい觀せもので眼を娛ませようといふのだな……ならない、ならない、貴様等には食物もある、酒もある、そして其の代はみんな私が拂つたのだ、それで澤山ぢやないか？ 行けといふに！（群衆無言のまゝ動搖し、そして徐々に散つて行く）一人もぐづ／＼してゐる事はないぞ！（父の腕を烈しく捉へて）あなたもです！ 誰れよりもあなたがです！ 罪はあなたにあるのだから、あなたが眞つ先にです！ 私の

涙はあなたに見せられない！ 私は一人であたい、知るべき事を知るために、墓場よりも寂しくしてゐたい！（身を動かさないブリンチアルレを見て）それから、君は？……誰れだ、そこに顔を包んだまゝ、石像のやうに立つてゐるのは？……死の塊か、恥の塊か？ 行けと言つたのが聞えなかつたか？（番兵の持つてゐた戟を引つ掴んで）この戟で追ひ出さうか？……劍に手をかけたね？……私にも劍はある、併し是れは別に使ふところがある……一人の男に對して使ふのだ、たゞ一人の男に對して……君が顔を隠してゐる布は何だ？……私は假面舞踏をする氣はないよ……返事をしないね……誰れだぞ聞いてるぢやないか？……待てよ——

（近づいて將に繃帯を剥がうとする。ナンナ仲に走り入つて、ギドーを止める。）

ナンナ さはつちやいけません！……

ナンブ.ナンモ

ギドー (驚愕して) ヲンナ、何だぞ、ヅンナ? 何うしてだしぬけにそんな力が出たか?

ギンナ 此の人は私を助けた人です……

ギドー はゝ! 此の男がお前を助けた……もう役に立たなくなつて……大した事だ、全く……むしろ……

ヅンナ (烈しく) だけど聞いて下さい、あなたお願ですから! 一言、たゞ一言!……此の人が私を助けてました、痛はつて呉れました、尊敬して呉れました!……私が保護して茲まで連れて來たのです……保護すると私が誓つて置きました、あなたの代りにも誓つて置きました、二人で誓つて置いたのです!……あなたは今怒つてゐらつしやるが、私の言ふ事を聞いて下さい、よく聞いてゐて下さい!

ギドー 誰れだ、此の男は?

ヅンナ プリンチブルレ……

ギドー 誰れだぞ?……何だぞ?……其の男があれか? 其の男がプリンチブルレか!

ヅンナ さうです、さうです! あなたの賓客です! 此の方が自身であなただの手に身を委ねたのです! 私を救つたのは此の方ですよ、あなた

……

ナンブ.ナンモ

ギドー (暫く愕然としてゐた後、段々意氣が揚り激烈になつて來て、ヅンナには止められなくなる) あゝ、さうであつたか、ヅンナ!……あゝ、まるで天の奥底からしたゝる露のやうに、私の魂に浸みて來た!……あゝ、ヅンナ、ヅンナ!……さうだお前の言ふ通りだ。當然の事だ、さうなくてはならな

つたのだ！ あゝ、お前の戦略が分つた！ さうだ、すっかり分つた！
併し今まで私には分らなかつた、気がつかなかつた！ ……敵を殺す女
は多かつたらう、ジュディスがホロフェルニスを殺したやうに！ ……けれ
どもプリンダルの罪はホロフェルニスよりも大いから、従つて大な
復讐がある！ ……其のために、お前は此の男をこゝへ連れて來たのだ。
生贄になりかゝつた我々の真中へ、此の男を連れて來たのだ、生贄が今
度は殺し手になる！ ……あゝ、美事な勝利だ！ ……あいつ、おづ／＼と
すなほにお前について來た。お前の與へた接吻が、憎みの接吻であつた
事に気がつかなかつた！ ……こゝまでやつて來て、係蹄にかゝつた！
……さうだ、お前のやり口は當然だ！ あの天幕の中で、恐しい罪惡の
あと、あいつ一人を斬り倒して了ふ——それでは満足が出来ないのだ

……あいつに逢ふ事がなければ、疑ひはいつまでも残つたかも知れない
……此の忌はしい條約の事は、みんな知つてゐるのだから、斯ういふ惡
巧に對して、どれくらゐの報があるか、世間へ知らせ置く必要がある！
……でもお前は、どうして是れを爲さげたか！ ……昔から是れほどのこ
とを爲果せた女は……あゝ、お前みんなに言つてお聞かせ！ (露臺の方へ走
つて行き聲を限りに叫ぶ) プリンチダレだ！ プリンチダレだ！ 敵がこゝに
ゐるぞ！ こゝへ捕へて來たぞ！

ナンナ (ギドーに縋りつき引き戻さうとしながら) いけない、いけない！ 聞いて
下さい！ 聞いて下さい、あなた、お願ひです！ あなた、あなた、さ
うぢやないのです！

ギドー (振りはなして尙一層高く叫びながら) 構はないでお居で、今に分る！ み

んなにすつかり知さなくてはいけない！（群衆の方へ叫ぶ）みんなやつて来い！聞かしてやる、聞かさなくちやならない！……それから、あなたもお父さん！そんな柱の後に蹲つて、神に祈つて、もお出でなさるか、あなたのために生じた害悪を償つて、私の幸福を恢復するやうに、神の出現でも祈つてお出でなさるか！戻つて来い！めでたい事だ！不思議な事が起つたのだ！石にまで此の事は聞かせてやりたい！私はもうこそ〜と隅へ寄つてあるく必要もなくなつた——そんな事は過ぎ去つて了つた——是れから私は、何人よりも純潔に、何人よりも富み榮えて行く！あ、今こそお前等は、私のヅナを喝采して呉れ！私も一緒にやつて喝采する、お前等みんなよりも高い聲で喝采する！（人民が露臺の方へ急ぎ行くのを引きするやうにして廣間に入れる）今度こそ、お前等に見物

させてやる！つまりそれが正義を示す道だから！……あ、私にも分つてはゐたが、併し斯う容易く結果があらはれやうとは信じなかつた！……敵を尋ねて、町に、森に、山に、私の生涯を費す間に、幾年となく経過しなくてはならないと思つてゐた！……所が、御覽、敵は忽然として私の前に現はれて来た、こゝに、此の部屋に、あの段の上に、我々の目の前に！驚くべき奇蹟ぢやないか！……とにかく我々は謹聴しなくてはならない……是れを爲おほせたのはヅナだ！……だから、ヅナに聞かなくてはならない！（マルコーの腕を捉へて）あなた、あの男が見えますか？

マルコー 然、誰れだ？

ギドー 前にお逢ひなすつた事がある……お話しなすつた事がある……あ

なたは、あの男の忠實な使番でした……

(プリンチアルはマルコーの方へ顔を向ける。マルコーそれを認めて)

マルコー プリンチアルレ!

(群衆ごよめく)

キドー さうです、さうです、プリンチアルレです、一毫の疑ひもない……もつと近くおいでなさい、あいつを御覧なさい、さはつて御覧なさい、何かまたあなたに新しい使番を頼むかも知れません……あ、あいつはもうもとの威勢あるプリンチアルレではない! 併しあいつに對して、氣の毒だと思ふ餘地は少しもない……あいつは、卑劣な奇怪千萬な策略で、私が世界の何ものにも代へない、たゞ一つのを奪ひ取つた、そのあいつが今、私の家へ來てゐる! 正義の力で連れて來られたのだ、

正義よりも更に驚くべき戦略の力で連れて來られたのだ、私が承知することの出来る一つの報を得ようとして……是れが奇蹟でなくてどうしよう? もつと〜近くおいでなさい! 恐れるには及ばない、あいつは逃げはしません! でも、氣をつけて戸をしつかりしめて置け、また別の奇蹟が見はれて、あいつを連れて行つてはならない……一時に處分しないで置かう……あいつのために未長く楽しんでやらう……あ、お前たち同胞諸君、見て御覧、お前等にあれ程の苦痛を與へたのは此の男だ、お前等を虐殺してお前等の妻子を奴隸に賣らうとしたのは此の男だ! さうだ、是れが其の男だ、それが私の手に這入つた、お前等の手に這入つた、我々の手に這入つたのだ、分つたか!……お前等もあいつのために苦められたが、併し私の苦みにくらべれば何でもない!……あいつは今

にお前等に呉れてやる……ヴンナがこゝへ連れて来たのだ、復讐をして我々の恥辱を雪がうとしたのだ！……（群衆に向かつて）みんなよく見て置いて呉れ、一點の疑ひがあつてもならない……是れが義勇から生じた奇蹟だといふことは、よく分つたらうな？……此の男が私のヴンナを奪つたのだ……私は途方に暮れて、どうする事も出来なかつた、お前等があれを賣つたのだ……私は誰れも呪ふのぢやない……過去は過去だ……お前等には、私の哀れな幸福よりも、お前等の生命の方が大事だつた、それがお前等の権利なのだ……併し、ヴンナが、私のヴンナが、一旦亡された愛を、其の亡したのから新に造り出す道を知つてゐた……お前等が打ちこはしたのを、ヴンナが建て直した……ヴンナの手柄だ！……リユークリースよりもジュデイスよりも偉大な女だ。リユークリースは自殺

した、ジュデイスはホロフェルニスを殺した！ あゝ、そんなことでは、まだ穩やかすぎる、簡單すぎる、音なしすぎる！……ヴンナは垂れこめた天幕の中であいつを殺しはしない、我々の所へ、生かして連れて来てみんなの前へ差出した！……では、何うして此れだけのことをしたか？……謹聴せい、これからヴンナが話して聞かせる！……

ヴンナ 然、話して聞かれます、けれども、まるで違つた話ですよ……

ギドー（ヴンナを止め、兩腕をヴンナの體に投げかけながら）先に接吻させて呉れ、みんなの前で……

ヴンナ（烈しくギドーを押しつけ）いえ、いえ、まだいけません！……いけません、私の言ふことをお聞きなさらないうちは、二度とそれはなりません！よく聞いて下さい、あなた！ 私の言ふのはもつと本當の名譽にかゝる

ことです、あなたの眼の暗んでゐる、そんな幸福よりも、もつと大きな幸福です！ あゝ、よかつた、多勢の人がみんな戻つて来て呉れて！ 却つてあの人たちがあなたよりも先に聞いて呉れるでせう、あなたよりも先に理解して呉れるでせう！ お聞きなさい、あなた！……分るまで私にさはらないでゐて下さい……

ギドー (ナンブを押しさめ、また抱かうさしながら) 分つたよ、分つたよ、知つてゐるよ——併し何よりも先に……

ワンナ お聞きなさい、私の言ふことを！ 私は生まれてまだ一度も偽りを言つたことはありません、けれど今日は一生のうちで一番深い、眞實を打ち明けます、たゞ一度しかない眞實です、死ぬか生きるかの眞實です……聞いて下さい、よく私を見て下さい、今が始めてのつもりで見て下

さい、今よりほか、あなたが私の望み通り本當に私を愛して下さる初めはないのです、其のつもりで見て下さい……私は、夫婦一緒に棲んで来た私の生涯を誓に立てます、私の身と私に下すつたあなたの身を誓に立てます！……信じられない事だと思ひなすつても、信じて下さい……私は此人の思ひ通りになつて……其の手に渡されたのですけれど、此の人は私の傍へ寄りなないで、私の身體に手もさへさへりませんでした……私は兄弟の家に居たと同じ體で、此人の天幕から歸て来ました……

ギドー 何うして？

ワンナ 私を愛してゐたからです……

ギドー あゝさういふことか、お前が言はうとしてゐたのは！ それが奇蹟だつたのか？……さうだ、さうだ、お前の最初の言葉ですぐ、私は何

ナンブ.ナンモ

か變つた事があるなと思つたが……ほんのちらりとだつたから、注意も
しなかつた……私の考では、困難や恐怖が……併し斯うなれば、事情
を見極めて置かなくちやならない……（急に静な聲で）そんな風にして、夜
中二人きり天幕にゐながら、あいつはお前をどうもしなかつたか？……

ワンナ いゝえ……

ギドー さはりもしなかつたか、抱きもしなかつたか……

ワンナ 私があの人の額に一度接吻してやりました、あの人はそのれを反
しました。

ギドー あいつの額に！……私を見て御覽、それでお前は、私にそんな
事が言へると思ふか……ワンナ、ワンナ、恐しい一夜でお前は氣が狂つ
たか？

ワンナ 氣なんか狂つてはゐません、私は眞實を言つてゐます。

ギドー 眞實！、あゝ、私もそれを求めてゐる、たゞそれだけを求めてゐ
る！ けれども、眞實は人間の事ではなくちやならない……何といふ！

此の男は自分の國に叛き、自分の生涯を亡ぼして、永久に世間を敵とす
る——それだけの事を、たゞお前に、一人で天幕へ来て貰ひたいばかり
にするのだ——そついが、額にたゞ一度の接吻を求めたきりだといふ。
そしてこゝまでお前と一緒にやつて来て、それを信じさせようとする？
……いけない、いけない、正しい道に戻つて、あんまり人の不幸を弄
ばないやうにしくちやいけない……若しそれがあの男の求めたすべて
であつたら、なせ是れほどの不幸をビザの人々の上に蒙らせたか？ なせ
斯んな絶望の淵に私を沈めたか？……此の一夜が私には十年にもあつ

ナンブ.ナンモ

た、殆ど生きてゐようとは思はれなかつた！……あゝ、あいつの求める所が、たいそれだけだつたら斯んな苦みはさせないで、ピザを救ふことが出来たらう！……あいつを神とも救世主とも思つて歓迎しただらう！お前は頭を振つてゐる……御覽、人民どもに判断させやう、あれらの答を聞かう（群衆に向つて）お前たち聞いたか？私にはなせヴンナが斯んな事を言つたか分らない。併し言つた事は言つたのだから、お前たちそれを裁判して呉れい……お前等は、ヴンナに救はれたのだから、或はそれを信ずるかも知れない……若し信ずるなら、さう言へ……信ずるものは、群衆の中から出て来い！……さういふ人は、こゝへ来て、かはいさうな人間の理性を嘲けてやれ！……出て来い、信ずるものは残らず出て来い！……私は早く其の人々が見たい、どんな種類の人間だ

か見てやりたい！……

（マルコー一人群衆の中から立ち出づる。他にはかすかな、ぼんやりした、不明瞭な咳きか聞えるばかり）

マルコー（突進して）私がそれを信ずる！

ギドー あなたが！あなたはあいつらの仲間だ……併し他のものは何うだ、他のものは？誰れか信ずるものがあるか？……（ヴンナに）お前、聞いたか？お前が救つてやつた人民は、出て来ない、部屋の間々に對しても恥しいからだ……幾たりか呟いてゐたものも姿を見せない、で、私は

ヴンナ 人民には、私を信じなくちやならない譯はありません。けれどあなたには其の譯があります、私を愛して下すつたあなたには！

ギドー あゝ、お前を愛してゐた私は、そのためにお前の言ふ事なら、問

抜になつて信じなくちやならないかね！ だめだ〜！ これ、私の言ふことを聞いておいで！ 私は冷静に話すよ、もう憤りはなくなつたから……私には負擔が多すぎた、突然年を取つたやうに感じ始めて来た、いや、怒つてゐるのぢやない……もう私に怒りは残つてゐない——其の代りに何か他のものが見えかけてゐる、それは——老年だか、狂氣だか、まだ自分にも分らない……差しあたり私は、私のものであつた幸福を、今一度見つけようと思つて眺めてゐる、探してゐる、自分の中をつまざるぐつてゐる……一つの望がある、たゞ一つ、殆ど手に取れないほど微な望がある……口に出せば、もう壊れて了ふ、それでも私は、絶望の中にそれを捕へようと企てる外はない……ナンナ、私が聞かない前にみんな呼び戻したのが悪かつた……あの化物めがお前を苦めた顛末を、人民の

前で公言するのが、お前に取つてどんなに不愉快な事だか、それを私が氣づかなくてはならなかつた……さうだ、二人きりになるまで待たなくちやならなかつたのだ、さうしたらお前も眞實を白状して呉れたらう、恐しい眞實を。だが、私は、もうそれを知つてゐる、他のものもみんな知つてゐる。ナンナ、隠したつて役に立たないぢやないか？……もう時が遅れたのだ……今となつては仕方がない、お前もさう思はなくちやならない……斯ういふ時には、理性も用をなさないから——

ナンナ あなた、よく私を見て下さい、今斯うして話してゐる私の眼にありつたけの眞心も力も眞實も籠つてゐます！……眞實です、眞實です、信じて下さい、あの人は私の體に手をかけませんでした。

ギドー いゝ！ 結構だ。大へん結構だ！ それでみんな分つた。みんな

もう消滅して了つた……さうだ眞實だ、むしろ戀なのだ。あゝ、分つた
お前はあの男を救はうとしてゐるのだね。愛してゐた女がさう急に變心
するものとは思はなかつた。併し、然うしてあいつは救はせない！(聲を
強めて)みんな、よく聞いて置け！ 私は最後の誓をする……斯うなるど
自分を引きしめるために人間以上の力がある、私の自制力が弱つて了ふ、
是れが私の最後の努力だ、もう一瞬間で私は倒れて了ふ……今のうちだ
……お前等、みんな私の言ふことが聞えるか、それとも私の聲が弱くな
りすぎたか？ もつと近く来い、近く寄れ！……みんな、此の女とあの
男を見て呉れ、あいつらは互に愛してゐる……いゝか、そこで、聞いて
置け。私は一言一句死にかゝつてゐるものに吞ます藥のやうに、念入り
に秤にかけて言ふ、此の二人はこゝから出て行かせる、私がそれを承知

するから、自由に、困難なく、手もさゝれないで、何等の害も受けない
で出て行かせる。二人に、欲しいものがあれば、何でも持つて行かせる。
お前等は隊列を明けて、二人のものに道を造つてやれ。お前等の望なら、
二人が通る道に花でも撒いてやれ。二人は愛の導くまゝに何處へでも行
くがい。それで、私が其の報酬として求めるのは、此の女が、何より
も先づ眞實を私に語ることだ、たゞ一つの本當の眞實を……それが、今
では此の女に残つてゐる、たつた一つの私の愛だ……私は眞實を求める、
私が與へるものに對して此の女は、必ずそれをよこす義務がある……ナン
ナ、お前も分つたか？ たゞ一言言へばいゝ……こゝにゐるものが、
みんな證據に立つ……

ナンナ 私は眞實を言ひました……あの人は私の體に手もかけませんでし

た……

ギドー よろしい、お前は明言した——あいつに宣告を下したのだ。此上別にする事はない(番兵等と呼び、プリンチアルレの方を指して)あの男は私のものだ、連れて行つてふん縛れ、そして此の下の一番底の穴牢へ押し込んで置け。私も一緒に行つて見やう。(ナンナに向つて)お前は、二度とあいつに逢ふことはならないよ、たい、私が歸りがけに、あいつの最後の言傳は聞いて来てやる……

ナンナ (プリンチアルレを捉へて連れて行かうとする番兵等の中に身を投げ入れる) いけない、いけない! 私が嘘を言ひました、私が嘘を言ひました!(ギドーにさうです、あなたのおつしやるのが本當です!(番兵を突きつけ)あつちへおいで、私のものを連つて行つてはいけない、此の人は私のものです、

私の自由です、お前たちのものぢやない! 私一人のものです! 私が懲らしてやる——あの卑怯者が、私のどうする事も出来ないのに乗じて……

プリンチアルレ (ナンナの聲を溺らすやうに)それは偽りです! それは偽りです! 私を救ふために偽りを言つておいでなさる。それよりも私は刑罰を受けます、ごんな苦痛でも——

ナンナ お黙んなさい!(群衆の方を向いて)恐れてゐるのですよ!(プリンチアルレに近づく、其兩手を縛らうとする様子で)繩をおよこし、鎖か手錠をおよこし! さあ、私は白状します、憎い奴だと思ひます、私が連れて来たのだから私が縛る!(兩手を縛りながらプリンチアルレにさうやく)黙つてゐらつしやい! ギドーは却つて私たちを救ふのです、黙つてゐらつしやい! 一緒にし

て呉れるのです。私はあなたのもので、あなたを愛します！ あなたを愛します！ 此の鎖はかけても、保護してゐて解いてあげます！ 二人一緒に逃げませう（強いてプリンチアルを制するやうに叫ぶ）お黙んなさい！（群衆に向かつて）助けて呉れと言つてゐるのですよ！（プリンチアルの顔を露出させて）此の顔を御覽、恐しい夜の記念が残つてゐる！（自分の外套を開き、血のにじんだ肩のまゝを示して）私にも其の痕がある！……此の人を見ておやり……此の卑怯な悪魔を！（番兵等がプリンチアルを連れて行かうとする様子を見て）いゝや、いゝや、此の人は私に任せてお置き！ 私の生贄だから、私の餌食だから！ 此の人を買つたのは私だもの！ 私のものぢやないか！

ギドー なせあいつはやつて來たらう、それから、なせお前は私に嘘を言つたか？

ナンナ（躊躇して、言葉をつぎ）なせ私が嘘を言つたでせう……私にも分りません、言ふ必要はなかつたのです……あゝ、さうく、私、言つて了はなくちやなりません……世の中には、自分のしてゐる事が分らなかつたり、たゞ暗闇に手探りしてゐたりする事がたびくあります……さうく言つて了ひませう、言つて了ひませう、もう本性を現はしたのですから……私が心配したのは、あなたの愛と、あなたの失望とでした、けれどもあなたは（一層かな聲で、一層決心した様子で）さうく、あなたがおつしやるやうな考ぢやなかつたのです……私はあなたと二人で、公然人民ごもの中に復讐をしようと思つてあの人を連れて來たのぢやありません。私の考はそれほど高尚でなかつたかも知れないが、あなたに對する愛のためにしたのです……私はね、あの人を残酷に殺してやりたいと思ひ

ました、それから、其の恐しい一夜の想ひ出で、あなたの一生涯を不愉快にするのが嫌だつたのです……復讐は暗い中でしようと考えました……その上、ゆる／＼と鬪り殺しにしてやりたい……ね……あの人をゆつくり殺して下さい、段々と血が一滴々々にした／＼つて、其の罪を拭ひ消して了ふまで……そしてあの恐しい眞實は、少もあなたに知らせたくなかつたのです、私たち二人の仲にそんなもの、影は入れたくなかつたのです……打明けて言へば、こんな事の想ひ出があなたの愛を滅しはしないかと心配しました……馬鹿な事だつたとは思ひますが……それをあなたに信じさせようとしたのは、狂氣の沙汰でした……けれど、もう何もかも知らせます……(群衆に向かつて)私の言ふ事を聞いてお呉れ、そして判断してお呉れ! さつき言つた事は、ギドーの爲を思つて言つたのです

よ、私たちの愛の爲に言つたのですよ……今度は、すっかり本當の事を言ひますよ……私はあの男を殺さうとしてあんなに、手傷を負はせてやりました……けれども武器を取られて了つて……仕方がないから、もつと深い復讐を工夫しました、そして笑つて見せたら、あの男は、それを信用して了つた……は、男といふものは馬鹿ね!……嘘を言ふことを崇拜してゐる! あの男は私を自分のものにしたと思つてる間に自分で囚へられて了つた。そして今こゝへ來てゐる。こゝはあの男の墓場ぢやないか。私が自身でそれをどぎしてやります……接吻をしてやつたら、それを信じて、小羊のやうについて來た……もう私の手のうちに掴んでゐる、二度と放しはしない!……

ギドー (近よつて) ダンナ!……

ワンナ よく私を見て下さい！……此の男は氣違ひです、私が「プリンチ
 ヴルレさん、あなたを愛してゐます！」とたつた一言言つたので、もう私
 を信じて了ひました……此の人は私についてなら、地獄の底までも來る
 でせう！……斯うして私は抱いてやりました……（熱情的にプリンチヴルレを
 抱く）そして言つてやりました「私はあなたを愛してゐます、さ、私の接
 吻を返して下さい！」さう言つてやりました……其の人が今私のものに
 なりました、神と世界に誓つて、私のものになりました！ 私は勝利を
 得ました、其の人を買ひ取てやりました！……（よろめいて圓柱にすがり身を支
 へる）氣をつけて下さい、倒れさうです、嬉しいからです、喜びが多すぎ
 るのです、復讐が出来るのですもの！（マルコー）お父さま、私の氣分が
 なほるまで、あの人の事は、あなたに願つて置きます……あの人の番を

してやつて下さい、牢屋を見つけて下さい、一番深い穴牢で誰れもく
 來ない所を……そして其鍵を私に下さい、鍵は私が持たなくちやなりま
 せん、すぐそれが欲しいのです。誰れもあの人にさわつてはならない、近
 よつてはならない、私が持つてゐるのだから、私のものだから、私た
 一人で處分します……あなた（ギドー）あの人は私の自由ですよ！（マルコ
 ーの方へ二三歩よつて）お父さま、あの人は私の自由です、あなた、責任を以
 て引き受けて下さい！（じつとマルコーを見つめる）分つたでせう？ あなたが
 あの人の保護者です。責任を負うて下さい。指一本も差してはなりません
 ん。私が行くまで、此のまゝそつくりしてゐなくてはなりません、さあ、
 あなたに渡しますから、（プリンチヴルレあちらへ連れて行かれる）さようなら、あ
 なた！ あゝ、また逢ひませう！

ナンブ、ナンモ

(ギドーは兵卒等の中に立つてゐる、兵卒等は亂暴にプリンチブルを引き立てる。ナンナは叫んでよろめいて倒れようとする、マルコー走りよつて、兩腕に支へる。)

マルコー (腕に横はるナンナの上に顔を俯せながら、低い聲で早口に) あい、ナンナ、私には分つてゐます。お前の偽りが理解される。お前は出来ない事を爲とげた……正義であると共に正義でない事を爲とげた、人間のする事は皆さうだが……併し、正義はやつぱり生る事だ……氣をたしかにお持ち、ナンナ。また偽りを言はなくてはならない時があらう、まだあれが信じないでゐるから……(ギドーを呼ぶ) ギドーや、ナンナがお前を呼んでゐる……ギドーや、ナンナが正氣づいた來ました……

ギドー (馳せて來てナンナを兩腕に抱き取る) ナンナ、ナンナ御覽なさい、ナンナが笑つてゐます!……ナンナ、話をおし!……私は決してお前を疑は

なかつた……もう一切濟んで了つた、忘れて了ふがい、——めでたい復讐を拭ひ去つて了はう……みんな悪い夢に過ぎなかつた。

ナンナ (眼を開き微かな聲で言ふ)あの人は何處にゐます?さう、もう分りました、思ひ出しました……私に鍵を下さい……牢屋の鍵を下さい、私よりほか誰れもいけません……

ギドー 番兵が歸つて來ると、すぐ鍵をお前に渡すだらう、そして一切お前の望み通りにするがい……

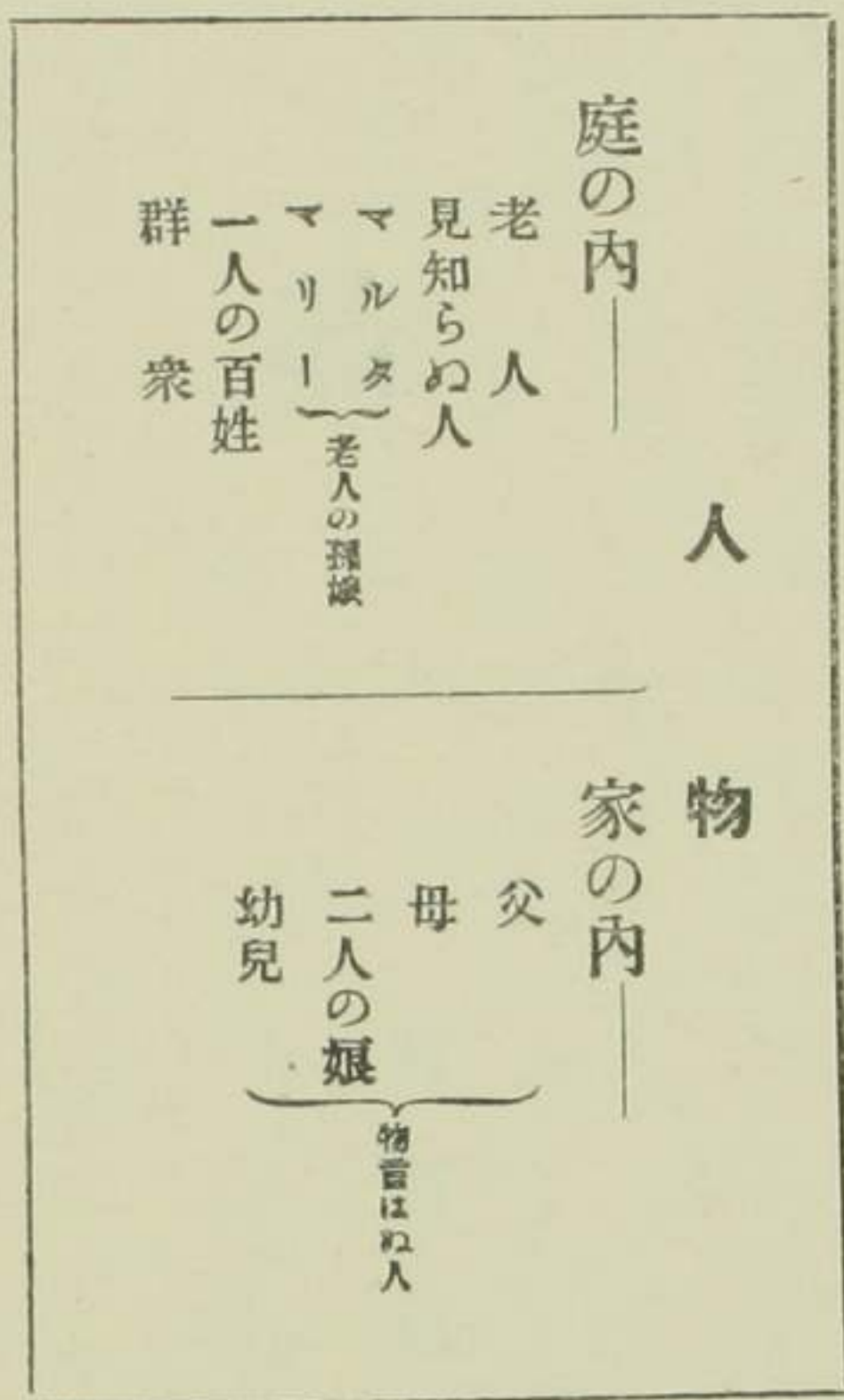
ナンナ 鍵は、私自身で貰ひます、たゞ一人で貰ひます、間違のないために、そして他の人を入れないために、あゝ、一場の悪い夢でした……けれど、これから美しい夢が始まるでせう、美しい夢が。……

……(幕)……

ナンブ、ナンモ

内
部

メーテルリンク作
秋田雨雀譯



柳の茂った古い庭

後方に一つの家、其一階の室の三つの窓から燈火がさしてゐる。この家の家族がランプを圍んで「宵の集り」をしてゐるのが窓を通してはつきり見える。父親はストーヴのある片隅に腰をかけてゐる。母親はテーブルに肘をかけて空を見つめてゐる。白い着物を着た二人の娘は刺繍をしながら静かな室の中で黙想したり微笑したりしてゐる。幼兒は母の左手に頭を休めて眠つてゐる。其内の一人が立上つたり、歩いたり、身振をしたりする度毎に、距離、光線、窓ガラスの加減で、其運動がいかにも嚴かに、緩かに、また離れ々々になつて、何さなく神秘的に見える。

老人と見知らぬ人とは用心深い様子で庭に入る。

内 部

老人 こゝは家の蔭の庭だ。誰もこゝへは來ない。戸は向側にある。みんな閉まつて、窓には連子がかゝつてゐる。だが此方には連子がないので燈火が見える……さうだ、みんなランプの光の中にちつととして坐つて

ある。聞かれないでい、ことをした。母親か娘が出て来やうものなら何うしたものだらう？

見知らぬ人 これから何うしませう？

老人 先づ室の中にみんなゐるか何うか見やうと思ふ。さうだ、父親はストープのある隅の方にゐる。何もしてゐない、両手を膝に乗せてゐる。母親はテーブルに肘をかけてゐる……

見知らぬ人 私達を見てゐるやうだ。

老人 いや、何も見てゐるのぢやない、目を据ゑてゐるのだ。私達は大きな樹の蔭にゐるので、あの人には見えないのだ。だがこれより近寄つてはいけない……あれ、死んだ娘の二人の姉妹もゐる。それから幼児は眠つてゐる。室の隅の時計は九時をさしてゐる……誰れも不幸があり

さうには思つてゐない、みんな黙つてゐる。

見知らぬ人 何か合圖をして父親に悟らせるやうにしませうか？こつちへ顔を向けました。窓を叩きませうか？あの人達の中の誰か、最初に聞く方がいゝでせう……

老人 何うしていゝか私には解らない……余程氣をつけてしなくてはいけない、父親は年老つて弱つてゐる——母親もやはりさうだ——それに娘達はまだ幼いのだ……みんなあの娘のことを、二度と愛されないやうに愛してゐた。私はあんな幸福な家庭を見たことがない。……いや、いや！窓の方へ行つてはいけい、何うもそれは一番悪い方法のやうに思はれるのだ。私達は出来るだけ手短かに、ほんの只事のやうにいつた方がいゝやうだ、そして私達は餘り悲しさうにしてはいけない、でないど

あの人は私達より一層餘計に悲まなければならぬやうに思つて、何うしていか判らなくなるかも知れぬから……私達は庭の向側の方へ廻らう。戸を叩いて、何事もないやうな風をして入らう。先づ私の方から入らう。私を見たとして誰も驚きはしないのだ、私は時々花や果物を持つて、あの人と一二時間を過すために、夜來合はしたことがあるのだから。

見知らぬ人 それでは、なせ私も一緒に行かなければならぬのでせう？一人ですらつしやい、あなたのお呼びなされるまで、私は待つてゐませう。あの人は私を見たことがないので——私はたゞ通りすがりの、知らぬ男です……

老人 私一人でない方がいゝやうだ。不幸といふものは一人の人の聲でい

はれると一層はつきりとして力が強いものだ。私は途中でもその事を考へてゐた……もし私が一人で行くとすると、私は初めからいはずなばならない、そして少しいへばみんな悟つてしまふ、私はもう何もいへなくなつてしまふ、そこでこの不幸を告げる一番後の言葉に續いて来る沈黙が私に怖しいのだ。私の心を痛めてゐるのがそこだ。もし私達は一緒に入るとすると、私はいくらか遠廻しに出来るのだ、例へば「かやうかやうしてあの娘さんを見つけた……娘さんは流の中に浮いてゐた、そして両手を組み合はしてゐた……」なぞといへるのだ。

見知らぬ人 手を組んでゐませんでしたが、體の兩側に浮いてゐたのです。

老人 それ、その通り知らずくの内に話し合ふやうになる——そこで不幸が話の枝葉の中に隠されてしまふ。でなく、私一人で行くとすると、最

初はじめの言葉が怖おそしい結果けつぐわになるかも知れない、そのために何なにんかことが起おこるまいものでもない。だが私達わたしたち二人が交かはる交かはるに言いつたら、わたし達のいふことをちつとして聴きいてゐて、私達わたしたちの顔かほの上に表あらはれてゐる悪い知しらせを見るのを忘わすれてしまふかも知れない、あの母親ははのゐるのを忘わすれてはいけない、あの人の命いのちは細ほそい糸いとに吊つるされてゐる……… 餘計よけいな言葉ことばを言いつて、悲かなみの最初さいしょに寄よせて來くる波なみの力ちからを弱よわくするのがいゝのだ。この不幸ふこうにあつた家族かぞくの周圍しうかいにみんなが集あつつて思おもひ／＼のことをいつた方ほうが一いっ番賢はんい道みちかも知れない、幾いくら無頓着むとんちゃくなものでも幾いくらかの悲かなみは持もつて行いつて呉くれる。骨ほねも折をらずに、音おともなく空くう氣きや光ひかりのやうに散ちつてしまふのだ………

見知らぬ人 あなたの着物きものは濡ぬれてゐます、飛石とびいしの上に雫しづくが落ちてゐます。

老人 水みづに引摺ひきずつたのはマントルのほんの裾すそのところだけだ。お前まへさんは寒さむさうに見える。お前まへさんの上うへ衣ぎは泥どろにまみれてゐる………私わたしは途中ちゆうちゆうで氣きがつかなくなつた、そんなに暗くらかたつのだ。

見知らぬ人 私わたしは腰こしのあたりまで水みづに浸しつたのです。

老人 お前まへさんのあの娘むすめを見つけたのは、私わたしの行くよほど前まへのことかな？
見知らぬ人 いえほんの少すこし前まへ。私わたしは村むらの方ほうへ歩いてゐたのです、もう大分だいぶ遅おそくなつて、河岸がわの上うへに闇やみが降り初はじめる頃ころです。私わたしは河かはを見つめながら歩いて來きました、なせといふに、河かはの方ほうが道路みちより明あかかつたからです。その時とき蘆あしの繁しげみの邊へんに妙めうなものが見えたのです………近ちか寄よつて見ると、あの女の髪かみの毛けです、それが頭あたまの周圍まわりに輪わを造つくつて、流ながれにつれてゆらくと動うごいてゐるのです………

(室の中では二人の娘は窓の方へ顔をむける。)

老人 あれ、あの二人の娘の髪が、肩の邊で慄へてゐる。

見知らぬ人 私達の方へ顔をむけた——たゞ顔をむけたばかりだ。私の聲が高過ぎたかも知れない。(二人の娘は元の姿勢に復る。) また向をむいてしまつた……私は腰の邊りまで水に浸つた、そしてあの女の手を捉まうとしました、それから譯もなく岸に引き上げました。あの女はあの妹姉のやうに美しかつたのです……

老人 もつと美しかつたと私は思ふ……なぜだか知らぬが、私はもう元気がなくなつてしまつた……

見知らぬ人 元氣？然し私達は出来るだけの事はしたつもりです。それにあの娘は死んでからもう一時間以上も経ちました。

老人 あの娘は今朝まで生きてゐたのだ！私はあの娘の會堂から出て來るのに逢つた。あれの見つかつたあの河の向のお祖母さんのところへ行くのだといつてゐた。今度いつ逢へるかあれには判らなかつた……何か私に尋ねたさうな様子であつたが、いひ悪くさうにして、急に行つてしまつた。だがそれは今私が考へてゐるので——その時は何も氣がつかなかつたのだ！——物をいふまいと思ふ人、人に理解されなと思ふ人のするやうな微笑ひ方をしてゐた……あれには希望も苦痛のやうに思はれたのだ、あれの目は覆ひ隠されて、私をはつきり見ることが出来なかつた。

見知らぬ人 あの女は晝頃からずつと土堤の上を歩いてゐたのだと百姓がつて居りました。花を探してゐるのだと思つてゐたのださうです……

多分そのためでせうあれの死んだのは……

老人 いや誰れにも解らない……何うして解るだらう？あれは思ふことを口にいへないやうな人間の一人に相違がない、人は死なうと思ふ時にはきつと一つより以上の理由があるものだ。あの室は見ることが出来ても人の靈魂は見る事が出来ない。誰れでもそのやうなものだ……誰れでも些末な事をいふ、だが、そこに間違ひのあるといふことに気がつかない。お前さんは假りに、この世の中に望みを失つた人と一緒に幾月かを暮したとする、その人の靈魂はもうこの世の中に執着がない、それを何の考へもなくその人に應待する、何うなるか後で初めて判るのだ。人は生命のない人形のやうに見えることがある、けれども人の靈魂の中には絶えずいろ／＼な物が往來してゐる。人は自分が解らない。あの娘

も世間の人と一緒に暮したかも知れない。自分の死ぬ日まで、『あなた、奥様、今朝は雨が降りさうでございます』『お晝にいたませう、私達はテーブルの十三人目でございます』『果物はまだ熟しません』といふやうなことをいつてゐたかも知れない。花の散つたといふことを笑ひながら話してゐても、暗いところで泣いてゐた。天國から降りた天使でも其ままには見られないものだ、物事が終へてしまはぬ内には人には解らない……あの娘も昨日の晩にはあの姉妹と同じやうにラムプの下に坐つてゐたのだ、もしこのことが起らなかつたら、お前さんはあの人達のほんとうの姿を見ることが出来なかつたのだ……私は初めてあの娘が解つたやうに思ふ……私達の日常生活には私達の解らぬうちに何かしら新しいものが入つて來てゐるのだ。その人達は夜晝とも私達の傍にゐるの

だ、がそれが永久に私達と別れを告げる其瞬間までそれをほんとうに見てゐないのだ。だが、それにしても自分のいふことだけをいひ、するこゝとだけをして行つたあの娘はなんといふ不思議な、可哀相な、飾りのない、底のない心であらう？

見知らぬ人 ご覧なさい、みんなが静かな室の中で微笑つてゐます……

老人 誰も心配をしてはゐない——今晚はあの娘の歸るのを待つてゐないやうだ。

見知らぬ人 みんな、ちつとして微笑つてゐる。だがご覧なさい、父親は指を唇にあててゐます……

老人 母親の胸に眠つてゐる幼児を指示してゐる……

見知らぬ人 母親は子供を覺すまいとして頭もあげずにゐる……

老人 みんなもう裁縫をしてゐない。死んだやうに静かだ！

見知らぬ人 白い絹の絲巻を落した……

老人 みんな子供を見てゐる……

見知らぬ人 誰れも他人が見てゐるとは知らない……

老人 私達とても、やはり、見られてゐるのだ……

見知らぬ人 みんな目をあげた……

老人 だが、何も見えない……

見知らぬ人 みんな幸福さうだ、だが何かあるのだ……私には解らない……

老人 みんな危険の届かぬところにあると思つてゐるのだ。戸も閉めてあるし、窓には鐵の懸金が下してある。古い家の壁に手を入れた、三つの

櫛の戸には門を下してゐる。要心の出来るだけはみんな要心してゐる……

見知らぬ人 晩かれ早かれいはなければなりません、誰か来て突然に打明

けてしまはぬとも限らない。女の子の死骸を置いて来た、あの芝原には

百姓供が大勢集つてゐます——あの内誰か戸を叩くといけない……

老人 マルタとマリィはあの小さな死骸の見張りをしてゐる。百姓供は木

の枝で吊籠を造へてゐた、そして私は大きい方の孫娘に、此方へ来るや

うになつたら教へて呉れといひきかして置いた。あの子の来るまで待つ

てゐやう、あれは私と一緒に待つて呉れるだらう……かうして、あの人

達を見てゐない方がよかつた。私は戸を叩いて、静かに入る、そして手

短かな言葉で打明けてしまふより他に仕方がないと思つてゐたのだ……

……だが私はこの人達がラムプの下にあゝしてゐるのをあんまり長い間見
てゐた……

(マリィ入る)

マリィ お祖父さま、もう参りました。

老人 あゝお前か？みんな何處にゐるのだ？

マリィ この前の坂の下のところに。

老人 みんな静かにして来るな。

マリィ 私は低い聲でお禱りをするやうにみんなにいつておいてよ。

老人 大勢ゐるのか？

マリィ 棺の周囲には村中の人が集つてゐました。みんな提灯を持って、
よ、だから私はみんな消さしたの。

内

老人 どの道を來るのだ？

マリイ あの細い道を來てよ。みんなゆつくり歩いてゐます。

部

老人 もう時が來た……

マリイ お祖父さん、もう話したのですか？

老人 この通り何にも話してゐないのだ。みんな、あゝしてランプの光の中に靜かに坐つてゐる。ご覧、ご覧、人生といふものは何んかものかお前に解るだらう……

マリイ まあ！何といふ靜かなんでせう！まるで夢の中にある人でも見てゐるやうですね。

見知らぬ人 あれ、ご覧なさい——二人の姉妹は立上りました。

老人 二人は立上つた……

見知らぬ人 きつと窓の方へ來るのです。

(この瞬間に一人の娘は第一の窓の方へ來る、もう一人は第三の窓の方へ。二人は兩手を窓ガラスにあてて闇を凝視する。)

老人 真中の窓へは誰も來ない

マリイ 何か探してゐるやうです、何か聽いてゐるやうです……

老人 姉妹の方は見えないものに微笑つてゐる。

見知らぬ人 二番目の娘は大變心配さうな目をしてゐる。

老人 氣をお着け、人の靈魂といふものは身體の外に何れだけ遠く擴つてゐるものか知れぬものだ……

(長い沈黙。マリイは老人の胸に寄添ひ接吻をする。)

内

マリイ お祖父さま！

老人 泣くものではない、な、いつかは自分の番になるのだ。

(問。)

見知らぬ人 永い間見つめてゐる……

老人 可哀相に、例へ十萬年のあひだ見てゐても何も見えるものではない

い——夜はこんなに暗いのだ。みんな此方を見てゐる、だが、不幸の

來るのは向ふの方なのだ。

見知らぬ人 此方を見てゐる方が却つていゝのです。何か芝原の方から來る

やうに思はれます。

マリ— 多分あの人達でせう、でも遠いので好くは見えません。

見知らぬ人 みんな、あのうねくした小徑を歩いてゐる——月の光を浴び

た、あの坂道のところでまた見え出して來ました。

マリ— まあ！大勢に見えること。私の來た時でもみんな町の端から登つて來るところでした。大變な廻道をしたのです……

老人 それでもやはり着くには着くのだ。私にも見える——芝原を通つてゐる——牧草と見別けがつかぬほど小さく見える。子供等が月の下で遊んでゐるやうにも思はれる。よしんばあの二人の娘があれを見たとしても氣がつかぬかも知れない。例へ背を向けてゐても、不幸は一步一步と進んで來る、そして二三時間の内にはつきりと見えて來るのだ。それに止つて呉れどはいへない、また持つて來る者にも止める力がないのだ。不幸は人を使ふ、また人は不幸に使はれるのだ。不幸は目標を持つてゐる、道が開けてゐる。不幸は倦きることはない、いつでも同じ考へを持つてゐる。人は不幸に力を貸してやる。人はそれを悲みながらも、傍へ

寄つて行く。心に悲みを懐きながらも、やはり進んで来なければならぬのだ……

マリー お祖父さま、姉さまの方は微笑ふのをやめました。

見知らぬ人 窓のころから行くところですか……

マリー お母さまに接吻をしてゐなさる……

見知らぬ人 大きい方の娘は目を醒さないやうにして幼児の髪を撫でてゐます。

マリー あゝ！お父さまにも接吻をするやうです、やつぱり……

見知らぬ人 また静かになつた……

マリー 二人ともお母さまの傍へ戻りました。

見知らぬ人 そして父親はじつと時計の振子を見てゐる……

マリー みんな、自分では氣もつかずにお禱をしてゐるやうに見えます……

……

見知らぬ人 みんな自分の靈魂に耳を澄してゐるやうに見える……

マリー お祖父さま、今晚はお話しなさいますな！

老人 それ、やはりお前も元氣がなくなつたのだ。あの人達を見なければよかつたのだ。私は八十三になるが、今初めてしみくど人生の姿を見たのだ。なせだか知れぬが、あの人達は私にはいかにも真面目な厳かなものに見える。あの人達は、私達もするやうに、たゞラムプの下に夜の來るのを待つてゐるのだ、それなのに、私達はあの人達が知らないほんの少しの事を知つてゐるばかりに他の世界から見下してでもゐるやうに思はれるではないか。それにお前の顔は何してさう蒼白めてゐるのだ

らう？ 私達は口に言ひ表はせぬとがあるからだ、それで私達は泣くのだ。世の中にこれほど悲しいことはない、これほど見てゐるものを怖れさせるものはない。あんな静かな様子をして坐つてゐるのを見ると、よしんばこんな事が起らないにしても私には怖しいのだ。みんな世の中を信じすぎてゐる。窓ガラス一重の外に敵をひかへて坐つてゐる。戸を閉めてゐるさへすれば、何事も起るまいと思つてゐる、物事の起るのは心の中のことだ、世界は家の戸口のところで滅んでしまふものではないといふことを誰も知らない。みんな自分の小さな生活に安心してゐる、他人の方が一層よく自分の事を知つてゐる、私のやうな老人が、戸口から二歩ばかり離れたところにゐて、この皺だらけな手の中に、傷ついた小鳥のやうに、あの人達の幸福を握つて、それを開き得ないでゐるとは夢にも

思つてゐない……

マリイ 可哀相ですわね、お祖父さま……

老人 可哀相だ、だが誰も私達を可哀相とは思つて呉れない。

マリイ 明朝お話しなさいまし、お祖父さま、明るなつてからね、明るい

ところではそんなに悲しくないかも知れないから。

老人 ほんに然うかも知れない。夜の内は言はずに置いた方がいゝだらう、明るい日の下で悲むのは快いものだ……だが、あの人達は何といふだらう？ 不幸は人を疑はせるものだ、不幸に逢ふ人は他人より先に之れを知りたがる——他人の手に之れを渡したくはないものだ。私達は何か盗んだやうに思はれるだらう。

見知らぬ人 それに、もう遅い、もうお禱の聲が聞える。

マリー みんなそこへ来ました——垣根の後を通つてゐます。

マルタ 私です。みんなを連れて来てよ——道で待つてゐるやうにいつておきました。(子供等の泣聲が聞える。)あゝ！子供等はまだ泣いてゐる。私は来るなつていつたんですよ、でも見るんですつて、そして母親さん達は私のいふことを聞かないの。行つてさういひませう——あ、もうやめました。もう用意はいゝの？私はおの人の持つてゐた指環を持つて来てよ、それから私はおの子のために果物も持つて来てよ、私はおの人をお棺の中に納めたの。まるで眠つてゐるやうでしたわ。髪にはほんとに困つてよ——よく揃はないんですもの。私はみんなにマルゲリットの花を摘んでもらひました——可哀相に他に花は何もないんですもの。こゝで何をしつてゐらつしやるの？何うしてあの人達と一緒にゐないのです？(窓の方を

眺める。)みんな泣いてもゐないこと！あの人達は——まだあの人達にいはないのですね！

老人 マルタ、マルタ、お前は未だ幼い、お前には解らないのだ……

マルタ 何うして解らないのでせう？(沈黙の後に、責めるやうな語調で。)それではいけません、お祖父さま……

老人 マルタ、お前には解らないのだ……

マルタ いえ、私が行つて打明けてしまひませう。

老人 お待ち、そして暫く見ておいで。

マルタ まあ！可哀相に！あの人達はもう待つてはゐられないのです……

老人 何故？

マルタ 私には解らないけれども、でもそんなことがある筈がないのです

もの！

老人 まあこつちへおいで……

マルタ よく我慢をしてゐること！

老人 さあ、こつちへおいでといふに……

マルタ (回顧しながら) 何處にゐるの、お祖父さま？ 私は悲しくなつてよ、もう見てゐられないの。何うしていゝか自分でも判らなくなりました……

老人 もう見てはいけない、みんな解るまでは……

マルタ 私も一緒に行きませう……

老人 いや、マルタ、こゝにおいで。この家の壁の方に背を對けた、この古い石のベンチに姉さんと腰をかけておいで、見てはいけない。お前はまだ若い、お前はもう忘れることは出来なくなるかも知れない。「死」

を目前に見る人の顔は何んなものかお前には解らないのだ。多分泣くだらう……でも振向いてはいけない。或はまたちつとしてゐるかも知れない。例へちつとしてゐても、決して振向いて見るではないぞ。人には『悲み』の通る道は解るものではない。大抵は小さな啜泣が底の方から込みあげて来るものだ。私はその啜泣を聞いて何うしていゝやら私にも判らないのだ……それはこの世の物ではないからだ。私の行く前に接吻をしてお呉れ。

(祈禱の聲は次第に近く聞へる。群衆の一部は庭に押し寄せて来る。忍び足の音や囁く聲が聞える。)

見知らぬ人 (群衆に) 止れ——窓の方へ行つてはいけない。あの娘は何處にゐる？

内

百 姓 誰です？

見知らぬ人 みんな——擔いで来た者だ。

百 姓 家へ入る並木道を歩いてゐます。

(老人は出て行く。マルタとマリーは窓に背を對けて、ベンチの上にかける。群衆の中から囁きの聲が聞える。)

見知らぬ人 シツ！話をしてはいけない。

(室の中では大い方の娘は立ち上り戸の方へ進む。そして門を外す。)

マルタ あの人は戸を開けるのでせうか？

見知らぬ人 いや、反對に強く締めてゐるのです。

(間。)

マルタ お祖父さまはまだ入らないのでせうか？

見知らぬ人 まだです。また母親の傍へ坐つた。他の人はちつととしてゐる、

そして幼児はやはり眠つてゐる。

(間。)

マルタ 姉さま、手をかして。

マリー マルタ！

(二人抱合ひ接吻をする。)

見知らぬ人 きつと今戸を叩いたのだ——みんな一度に顔をあげた——お互に顔を見合はせてゐる。

マルタ あゝ！あゝ！姉さま！私もうたまらなくなつたわ。

(啜泣いて姉の肩に寄りかゝる。)

見知らぬ人 また叩いたのだ。父親は時計を見てゐる。立上つた……

内

部

マルタ 姉さま、姉さま、私も行きませう——あの人達ばかりではいけません。
マリ— マルタ、マルタ！

(マルタを押へる。)

見知らぬ人 父親は戸のところにゐる——門を外した——そつと戸を開けかけてゐる。

マルタ あゝ！——あれが見えませんか……

見知らぬ人 何んです？

マルタ 擔いで来た人が……

見知らぬ人 いや、戸を少し開けたばかりだ。庭の片隅と噴水の外何にも見えません。あの方は戸に手をかけてゐる——一歩退つた——「あゝ、貴方で

三

すか！』と言つてるやうに思はれる。あの方は手をあげた。また静かに戸を閉めた。あなた方のお祖父さまは室の中へ入つた……

(群衆は窓の方に進む。マルタとマリ—は半ば立ちかける、立上る、それからびつたり寄添ひながら人々の後について窓の方へ行く。老人の室の中へ進んで行くのがみえる。二人の姉妹は立上る、母親も立上る、幼児を外から見えるやうに、自分の座つてゐた肱掛椅子に寝かす、幼児は室の中央に顔を少し前に曲げて眠つてゐる。母親は老人の方へ進み寄り手を差出したが、老人の握手せぬ内に引込める。一人の娘は訪問者のマントルを脱がせやうとする、他の一人は肱掛椅子をすゝめる。然し老人はそれを拒む軽い身振りをする。父親は驚いた様子で微笑する。老人は窓の方を見る。)

見知らぬ人 あの人は言ひ兼ねてゐる。私達の方を見てゐる。

(群衆は囁く。)

見知らぬ人 シツ！

三九

(老人は、窓の方へ顔をむけてゐたが、急に目を外す。一人の娘がやはり肱掛椅子をすゝめるので、さうさ座る。それから右手で二三度前額を撫でる。)

見知らぬ人 腰をかけた……………

(父親が氣輕に話してゐる間に、室の中の他の者も腰をかける。さうさ老人は口を開く、そして其聲は一々みんなの注意を惹いてゐるやうに見える。父親はそれを遮ぎる。老人は再び語り出す、次第くゝにみんなが緊張し、心配さうになつて来る。突然に、母親は立上る。)

マルタ あゝ！お母さんに解つた！

(マルタは振返り両手で顔を掩ふ。新に群衆の囁が聞える。お互に肱を突き合ふ。子供等は見やうとして泣くので、母親達はいふまゝに差上げて見せる。)

見知らぬ人 シツ！まだ話してゐない……………

(母親は心配さうに老人に質れてゐる様子。老人は二言三言いひ出すと、突然みんなが立上る、そして老人に質れる。老人は點頭いて肯定の意を示す。)

見知らぬ人 言つてしまつた！突然に言つてしまつた！

群衆中の聲 言つてしまつた！言つてしまつた！

見知らぬ人 何も聞えない……………

(老人は立上り、振向きもせず、自分の後の戸を指さす。母親、父親、それから二人の娘も戸の方へ突進する、父親は骨折つて戸を開ける。老人は母の出て行くのを留めやうとする。)

群衆中の聲 みんな出て行くところだ！みんな出て行くところだ！

(庭の群衆は動搖を初める。みんな家の向側の方に急いで行つてしまふ。たゞ見知らぬ人ばかり窓のところに居残る。室の中では、疊戸は、さうさ開放され、みんな一度に出て行く。戸の外には星の耀く空が見える、庭も噴水も月光に照されてゐる。たゞ室の中には幼児ばかりは平和さうに、肱掛椅子に眠をつけてゐる。間を置く。)

見知らぬ人 幼児はやはり目を醒さない！(出て行く。)

16039

有所權作著

製複許不

大正二年九月五日印刷
大正二年九月十八日發行

著者	東京府豊多摩郡戸塚村字諏訪 島村瀧太郎
發行者	東京市牛込區通寺町十四番地 尾後家省一
印刷者	東京市京橋區弓町十三番地 伊藤元治郎
印刷所	東京市京橋區弓町十三番地 千代田印刷株式會社

定價小包
金送包
七料
五十金
錢五八

發行所 東京牛込神樂坂上 南北社

電話番町三八〇四
振替東京一四九

